こち亀二次創作「早矢のギャルゲ奮闘録」

シベリア！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

早矢は思う。

もしも両津に、今でも貴方が好きですと伝えたら、どうなるだろうかと……

だけど早矢には、今でも貴方が好きですと伝える勇気が無いので……この位で良いかと妥協した。

そんな物語です。

ｐｉｘｉｖにも同じ作品を投稿しています。

目　次

こち亀二次創作「早矢のギャルゲ奮闘録」――――――1
こち亀単独二次創作「うそつき早矢」――――――28
こち亀単独二次創作「飛鷹姉妹のキラーパス合戦」――――――45
早矢のサバゲ黙示録――――――64

こち亀二次創作「早矢のギャルゲ奮闘録」

きっかけは、新葛飾警察署内でのちょっとした世間話であった。
「なあ知ってるか？　先週発売したギャルゲーなんだが」
「ああ、公園前派出所の両さんがモデルなんだろ」
「やっぱりそうなのか。　でもあの人、ギャルゲーにできる程モテてたか？」
「派出所勤務の麗子さんとマリアさん、交通課の纏さん、早矢さん、それと右京って娘がヒロインのモデルになってるって聞いたぞ」
「右京……って、誰だ？」
「前に婦警と両さん達がタヒチ旅行に行った時に一緒に来てた娘……らしいぞ。
俺は写真でしか見た事ないけど」
「俺も買ってみようかな」
「買うなら早くした方が良いぞ、人気で品薄になっているらしいから。
デートシーンとか、新婚生活の描写が結構良いらしいぞ。
俺も買うのに苦労し……ごほんっ！　噂ではな」
「タイトル、何だったっけ？」
「亀有メモリアルだよ」
署員同士のそんな世間話があった。
普通なら誰も気に留めないような他愛も無い世間話を、休日を新葛飾警察署に併設されている弓道練習場で過ごし、帰り支度をしていた早矢が聞いていた。
「両津さんと……デートを……」
早矢が小さくそんな事を呟いたのを、聞いたものはいなかった。
……
……
……
顔認証、静脈認証、全身スキャン、声紋認証、筆跡認証の超・超厳しいセキュリティを一つずつこなす。
我侭放題な新葛飾警察署婦警達の象徴のような出入り口を抜けて、

早矢が真っすぐ自分の部屋へと歩き出す。
普段は着ないロングコートで全身を覆い、屋内だというのにサングラスを装着し、暖房の効いた寮の廊下を駆け足一歩手前の速さで進むため、早矢の顔はすぐに赤くなり、呼吸も鼓動も速くなり、首や額は汗に濡れる。
奇妙な事にロングコートは新品そのもので、しかも首の後ろに値札がついていた。
そんな奇妙な格好のまま、早矢は何度も何度も知り合いが廊下を歩いていないか、誰かに注目されていないかを確認するため、首をきょろきょろと左右に振る。
「あら、早矢さん。　今お戻りですの？」
……が、しかし、自分の部屋まであと一歩といった所で麻里愛・通称マリアに声をかけられてしまった。
「ひゃうぅ!?」
瞬間、早矢の方がビクンと震え、明らかに挙動不審な叫び声が漏れる。
ほぼ同時に、ロングコートの内側から四角いシルエットが浮かびあがった。
「早矢さん、どうかしましたの？」
その明らかに挙動不審なうろたえぶりに、思わずマリアがそう尋ねる。
「い、いえ、何でもありませんわ！」
そう答える早矢の声は微妙に上ずっている。
当然、増々マリアの疑心というか、違和感のようなものを強めてしまう。
「早矢さん、寮の中でコートを着たままでは暑くありませんの？」
「いえ、戻って来たばかりですから脱ぐのを忘れていまして」
「あら？　コートの下に何か四角い物が……」
「何でもありません！　何もありませんからっ!!」
これ以上会話を続けるとボロが出ると、早矢は足早に……いや、全力疾走で廊下を進む。

途中何度かコートの下に隠した箱を落としかけ、慌てて担ぎ直すという場面もあったが、とにかく早矢はマリアを振り切り、女子寮の自分の部屋まで駆け込むことに成功した。
嘘が嫌いな早矢の父親が見たら罵声と共に殴りかかって来るであろう拙い対応であったが、彼女にとって幸いな事に、父はこの場にいなかった。
「はぁ……はぁ……ふぅ……」
早矢が個室の扉にもたれかかり、大きく肩で息をする。
顔が真っ赤になっているのは、暖房が効いた室内を厚着で全力疾走したからだけではない。
服の下のある物品……亀有メモリアルのせいである。
「か、買ってしまいしたわ……亀有メモリアルと、ノートパソコン……」
早矢がごそごそと新品のコートの中からノートパソコンの箱と、亀有メモリアルと書かれたＰＣゲームの箱を引っ張り出す。
ゲームの箱には水着かと思う程に肌の露出が多い婦警服を着て銃を構える麗子とマリア……ではなく、秋元麗子をモデルにしたキャラクターと、マリアをモデルにしたキャラクターの姿がある。
箱の裏面には擬宝珠纏、檸檬、磯鷲早矢、日鷹右京をモデルにしたキャラクターの立ち絵、デートシーンと思われるＣＧサンプルと、ギャルゲに良くあるエロハプニングと思われるＣＧサンプルまで描かれている。
どのキャラクターも別人と思えば別人に見え、同一人物と思えば同一人物に見える、微妙なボカし方のデザインがされていた。
いずれにせよ早矢は、こんなものを買っている所を見られてはいけないと急遽服屋に飛び込んでロングコートとサングラスを買い、コートの下にゲームの箱を隠して帰宅したのだ。
「やっぱり良くないですよね、友人がモデルの……この……
い、いかがわしいゲームで遊ぶなんて……」
彼女の常識からすれば肌色の面積が異様に広く、Ｒ―１８一歩手前のパッケージを見ているだけでも恥ずかしくなってくる。

たまたまいつもより遠回りして帰る途中、たまたまＰＣショップのゲーム売り場を通りかかり、たまたま棚に一個だけ残っていたそれをレジに持って行ってしまい、たまたまゲームプレイできますというポップ広告のあるノートパソコンも買ってしまったとはいえ……まるで友人の痴態を除き見るかのような羞恥心と罪悪感に襲われる。
「と、とりあえずパソコンを……えっと……」
まるで目の前の問題から目を逸らそうとしているかのようにノートパソコンの電源をつけようとする。
するが……
「こ……この線はどこに繋げば……えっと……ボタンがこんなに沢山……Ｆ２？　Ｆ３？
何を押せば何が起きるのか全然分からないわ。
そ、そうだわ説明書を……ど、どこに何が書いてあるのか全然分からない……」
……
……
……
「……早矢、大丈夫か？」
「大丈夫です」
……翌朝、げっそりとした表情でミニパトのハンドルを握る磯鷲早矢の姿があった。
同僚の纏が思わず不安になる程のやつれっぷりであった。
昨日早矢が読んだ説明書は、高性能ゲーミングパソコンに付属していたもの。
当然、パソコン初心者が読む事は全く想定していない。
専門用語てんこ盛りの辞書のような説明書は、片手で数えられる回数しかパソコンに触った経験が無い早矢を早々と置き去りにして、まるでターヘルアナトミアの翻訳に挑む杉田玄白、前野良沢のような苦しみを生じさせた。
結局、四苦八苦した挙句どうにかこうにか初期設定に成功し、ゲームをインストールし、ゲームのタイトル画面にまで辿りついた頃には

東の空に朝日が昇っていたのだ。
磯鷲早矢、完徹である。
いくら武術の達人とはいえ、完全徹夜の翌日に車の運転は普通にキツい。
……
……
……
その日の夜。
「……さて」
磯鷲早矢（完徹）の目の前に『亀有メモリアル』のタイトル画面が映る。
パソコンを起動するだけならと、ゲームの箱を開けるだけならと、ゲームをインストールするだけならと、ゲームタイトルと表示するだけならと自分自身に言い訳をして、とうとうここまで来てしまった。
主題歌が流れ、画面にタイトルロゴと『ＧＡＭＥ　ＳＴＥＲＴ』の文字が浮かぶ。
画面のどこかでマウスを一回右クリックすれば、亀有メモリアルの本編に進む。
……早矢の指先が震えていた。
「さ、流石に……いくらなんでも……これ以上は……」
いくらなんても悪いような気がした。
本物の擬宝珠纏や秋元麗子、麻里愛のデートシーンや新婚生活を覗き見る訳ではない。
あくまで纏や麗子、マリアをモデルにした人物のキャラクターと、両津をモデルにしたキャラクターの物語を描いたゲームなのだ。
そう自分自身に言い訳をして、早矢の右手がゆっくりとマウスに伸び……
「や、やっぱりいけませんわ！　こんないかがわしいゲームは!!」
右手がマウスに触れた瞬間、早矢は弾かれるように後ずさる。
やはり何度考え直しても、自分がとても悪い事をしているような気になるのだ。

「で、でも……こういうのを知るのも勉強として……」
早矢はそうやってまた自分自身に言い訳を始める。
嘘が嫌いな彼女の父親が見たら殴り倒されるような光景だが、幸か不幸かこの場に早矢の父はいない。
早矢は自分のパソコンを持つのも初めてであれば、ギャルゲーを見るのも初めてだ。
羞恥心と罪悪感が心を覆い、好奇心がそれを突破しようと暴れ出す。
そしてふと思い出す……
「……確か、個別のルートに入ってから、デートや新婚生活が描写されるんですよね」
再び署員同士の世間話に聞き耳を立てて得た情報が早矢の背中を押した。
「私のルートに入れば、他の人のデートや、新婚生活は見れないから……」
そんな事を呟き……早矢の右手がマウスをクリックした。
「だ、大丈夫ですわ……両津さんの言動は誰よりも分かっていますから。
それをそのまま辿っていけば、私のルートに入れる筈……」
早矢がもう一度マウスを右クリックして、ＮＥＷＧＡＭＥを選択する。
自分はこんなにも両津の事が大好きなのだから、両津の行動を再現すれば、きっとゲームの中の早矢（をモデルにしたキャラクター）も両津の事が好きになる筈だと思った。
そして……
「両津さんならこういう時はこうする筈だから……
確かこの時、謹慎になって、纏さんのご実家に住み込みで働くようになって……」
……
……
……

「……早矢、本当に大丈夫なのか？」
「大丈夫です」
……磯鷲早矢、完徹２日目である。
昨晩プレイを始めた亀有メモリアルであったが、初めの方こそ順調にシナリオを進められたものの、途中から纏（をモデルにしたキャラクター）との交流がどんどん増えていき、気がつけば纏（をモデルにしたキャラクター）と両津（をモデルにしたキャラクター）のデートシーンや、結婚式のシーンや、新婚旅行のシーンや、新婚生活のシーンや、R―18一歩手前のエロハプニングといった愛のメモリアルを延々と見続ける羽目になり、スタッフロールが流れる頃には完全に夜が明けて、勤務時間直前になっていたのだ。
完徹１日目はギリギリ勤務ができる程度の消耗度であったが、流石に２連続で完徹となっては、真っすぐ車を走らせる事すら難しくなっている。
右にふらつき、左に蛇行し、次の瞬間にはアクセルとブレーキを踏み間違い、ジェットコースターよりもヒヤヒヤする運転を連発していた。
「ちょ!?　早矢ぁっ!!　流石にヤバいよ!!　一旦止まって、運転代わるから！」
「大丈夫です！　全く問題ありません！」
「問題あるっての絶対！　いいから運転代わって！」
纏が半ば強引にハンドルを奪い取り、腕づくで運転席から退かせる。
そして助手席に早矢を座らせたまま、基本荒々しい纏にしては珍しく安全運転で車を走らせ……
「勘吉、いるかい？」
……亀有公園前派出所の傍で車を停めた。
「纏か、何の用だ」
競馬新聞に丸とかバツとかを書き込んでいた、両津が顔を上げる。
部長は署の会議に出席のため、中川と麗子はパトロール中のため、現在派出所には両津１人しかいなかった。

「悪いんだけどさ、しばらく奥の部屋で早矢を休ませてやってほしいんだ」
「何、早矢をか？　体調でも崩したか？」
「良く分からないんだけど、顔色が悪くてね。
　しばらく休んでもらった方が良いと思うんだけど……駄目か？」
「何だサボリか」
「馬鹿、お前じゃあるまいし、早矢がそんな事するかよ」
「そりゃそうか。　今は奥の部屋が空いてるから、そこで仮眠させても良いぞ。
　仮眠用の布団の場所は分かるか？」
「知ってるよ、大丈夫。　2～3時間したら迎えに来るから」
「分かった、部長が戻ってきても適当に誤魔化しておいてやるよ。
　まあ、部長は早矢には甘いから誤魔化すまでもないかもしれんが」
「ありがと、助かるよ」
　纏が奥の部屋の机を脇に寄せ、押し入れから仮眠用の布団を引っ張り出した。
　部長達が休暇中の間だけとはいえ、纏は一時期公園前派出所勤務だった事がある。
　派出所のどこに何があるかはしっかりと覚えていた。
　纏が布団を敷いている間に、両津は二夜連続の徹夜でへろへろな状態の早矢を担ぎ、奥の部屋へと連れて行く。
「早矢にしては珍しいな」
「す、すみません……ご迷惑を……」
「なぁに気にすんなよ」
「早矢、しばらくしたら迎えに来るから、それまでちゃんと休んでなよ」
「はい……」
　早矢を布団の中に転がすと、あっという間に小さな寝息を立て始める。
「勘吉、うるさくするなよ」
「努力はするよ。　こういう日に限って特殊刑事が飛び込んで来た

り、
　部長がガトリング砲を担いで怒鳴り込んで来たりするんだがな」
「特殊刑事はともかく、部長が怒るのはお前が原因の場合が殆どだろ」
「部長はシャレが分からないんだよ」
「じゃあパトロール中だから、あたしは行くよ。　早矢の事はくれぐれも頼むからな」
「何かあったら電話しろよ」
「ああ、ありがとな」
　纏が1人ミニパトに乗り込んで、パトロールの続きに戻る。
　両津も再び自分の席で明日のレースの勝馬予想に戻っていった。
「ここは4を軸に流しで……まず4―2、4―6は切り捨てるべきだな。
　3番は悪天候のレースでの勝率が高いんだが、天気予報では晴天になってるしな……
　うむ、やはり4―3も捨てよう。　となると……」
　その日は珍しく、派出所は静かであった……
「両津うううぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇぇーーーっ!!」
　……いや、この日も公園前派出所にうるさくて暑苦しいのが飛び込んできた。
「なんだ誰かと思ったら左近寺か。　なんの用だ？」
「亀有メモリアルだ！
　この間買ったんだが何度やっても早矢さんのルートに行けんのだ!!」
「わーっ！　馬鹿っ！　しーっ！　しぃぃーーっ!!」
　亀有メモリアルの名前が出た瞬間、両津が慌てて左近寺に飛び掛かり、その口を無理矢理塞いで黙らせた。
「……ふぅ、麗子がパトロール中で助かった。　危うく麗子ドールの二の舞になる所だった」
　盛大に冷や汗を流しながら両津がほっと一息つく。
「両津、お前まさか……」

「こら、大きな声を出すんじゃない。
奥の部屋……は、今塞がってるから、台所で話をするぞ」
引っ張りこむかのように両津が左近寺を奥の台所に連れて行く。
「あのゲーム、お前が関わってたのか？」
「わしの協力無しにあんなゲームが作れる訳がないだろ」
「流石に知り合いをギャルゲーのモデルにするのは酷くないか？」
「そんなゲームを嬉々としてプレイしているお前に言えた台詞かよ。
それにわしは過去の体験談をそのまま話しただけだ。
ゲームを企画したのも作ったのもあくまでゲーム会社。　シナリオ監修もしていないぞ」
「ゲーム会社ってのはなんでもやるものだな」
「スマホゲーの台頭で、ギャルゲー業界は苦境に立たされているからな」
「それはそうとして、何回やっても早矢さんの個別ルートに入れないんだが、
何か分からないか？」
「……纏ルートに進むのか？」
「な、何故それを!?」
左近寺が驚きの表情と共に後ずさる。
「やはりか。
テストプレイヤーも初見プレイではほぼ全員が纏ルートに進んでしまったらしい。
開発者の話では、わしの普段の言動を再現すると纏ルートに行ってしまうらしい」
「そ、そうだったのか……」
「良いか左近寺、わしが一般市民をボコボコにして謹慎になるイベントが発生するだろ。
その時に寿司屋にバイトに行く選択肢が出るが……あれは罠だ」
「わ、罠だと……？」
「あそこで寿司屋に行くと纏ルート、右京ルートにぐっと近づくが、
その選択肢を選んだ瞬間に早矢ルートに行ける可能性がゼロにな

る」
「なにぃ!?」
「早矢ルートに行きたい場合、謹慎になっても寿司屋に近づくな。
謹慎期間中に一度でも店内に入ると、バイトを承諾した事になるからな」
「くそっ、両津と言えば寿司屋だからな。
ついついバイトに行く選択肢を選んでしまっていた」
「弓道場に行けば比較的早矢に出会いやすいから、
時間があったらできるだけ弓道場に行くようにしておけ。
それと白線流しイベントと、
纏の友人を更生させるイベントは好感度の伸びが大きいから絶対に回避しとけ」
「分かった、助かったぞ」
左近寺は満足した様子で公園前派出所から立ち去って行った。
両津は誰にも聞かれてないだろうなと、きょろきょろと派出所の前の通りを見回し、部長や麗子といった聞かれたら拙い連中の姿が見えないことを確認すると、ほっと胸をなでおろした。
そんな両津と左近寺の会話だが……
「……寿司屋でのアルバイトを回避するのでしたか」
仮眠を取っていた箸の早矢が聞き耳を立てていた事に気が付く者はいなかった。
……
……
……
その日の夜。
「……さて」
早矢の目の前に再び亀有メモリアルのタイトル画面が表示された。
昨晩はうっかり寿司屋に行ってしまうというミスにより、早矢ルートではなく纏ルートに入ってしまった。
しかし、それを防ぐ手段は両津から聞き出した。
早矢は再び『ＧＡＭＥ　ＳＴＥＲＴ』文字をクリックする。

「纏さんの実家にはできるだけ近づかずに……
　弓道場ができたらできるだけ足を運んで……あら？　弓道場開設反対集会ですか？
　弓道場ができないと困りますし、ここはＮＯを選択して……」
……
……
……
……数日後。
「……早矢、最近ずっと顔色が悪くなっていないか？」
「大丈夫です」
……磯鷲早矢、完徹である。
　昨晩プレイした亀有メモリアルであったが、途中まで順調にシナリオを進められたものの、途中からマリア（をモデルにしたキャラクター）との交流がどんどん増えていき、気がつけばマリア（をモデルにしたキャラクター）と両津（をモデルにしたキャラクター）のデートシーンや、結婚式のシーンや、新婚旅行のシーンや、新婚生活のシーンや、Ｒ―１８一歩手前のエロハプニングといった愛のメモリアルを延々と見続ける羽目になり、スタッフロールが流れる頃には完全に夜が明けて、勤務時間直前になっていたのだ。
「勘吉、悪いんだけど今日も派出所で早矢を休ませてやってくれないか？」
　結局、今日もまた早矢を派出所の奥で休ませる事になり……
「両津うううぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇーーーっ!!」
　またもや亀有メモリアルをプレイし続けている左近寺が助けを求めて飛び込んできた。
「なるほど、今度はマリアルートに吸われたか」
「どうすれば良いんだ両津!?」
「わしが弓道場開設に反対するイベントがあったが、スキップしただろ？」
「な、何故それを……」

「そのイベントは早矢ルートに進むための必須イベントだ。
　そのイベントをスキップしている場合、どれだけ好感度を稼いでも無駄だ。
　弓道場はマリアと右京の好感度が上がるイベントも多いから、
　たぶん二番目に好感度が高かったマリアのルートに進んだんだろう」
「そうなんだ！
　気が付いたら男に戻ったマリアさんに尻を掘られるイベントが始まってしまったんだ！」
「ほう、同性愛ルートに行ったか。
　実はマリアと右京のルートは２種類用意されていてな、
　マリアの場合魔法使いに頼んで女になった後、女のまま最後まで行く異性愛ルートと、
　もう一度男に戻る同性愛ルートがある。
　同性愛ルートは運も絡むからな、ラッキーだったじゃないか」
「冗談じゃない！　俺は早矢さんのシナリオが見たいだけなんだ！」
「まあとにかく、弓道場開設阻止のイベントはスキップするな。
言っておくが勝つなよ。
　弓道場がゲームセンターに改装されるイベントを起こしても早矢ルートは潰れるから、
　わざと負けろ」
「な、なるほど」
「ただし大差で負けると早矢の好感度が下がる、逆に僅差で負ければ好感度が上がるから、
　早矢ルートに進みたい場合、できるだけ接戦になってから負けた方が良い」
「分かった！　助かったぞ両津！」
　そんな両津と左近寺の会話を……
「……弓道場開設は反対して、僅差で負けるんですか」
　仮眠を取っていた筈の早矢がやっぱり聞き耳を立てていた。
……

……

……

その日の夜。

「上手く負けられましたわ。　後は私のイベントをできるだけ見て……

でも、超神田寿司からの収入が無いから弓道や茶道の道具を買うお金が足りませんわ。

ここはまじめに派出所に勤務して、給与査定とボーナスを……」

……

……

……

……数日後。

「……早矢、本当に大丈夫か？　何かヤバイ病気にでもなってるんじゃないのか？」

「大丈夫です」

……磯鷲早矢、今日もまた完徹である。

昨晩プレイした亀有メモリアルであったが、途中まで順調にシナリオを進められたものの、途中から麗子（をモデルにしたキャラクター）との交流がどんどん増えていき、気がつけば麗子（をモデルにしたキャラクター）と両津（をモデルにしたキャラクター）のデートシーンや、婚約者決定戦なる大会で激闘を繰り広げるシーン、結婚式のシーンや、新婚旅行のシーンや、会社経営のシーン、新婚生活のシーンや、R―18一歩手前のエロハプニングといった愛のメモリアルを延々と見続ける羽目になり、スタッフロールが流れる頃には完全に夜が明けて、勤務時間直前になっていたのだ。

「勘吉、悪いんだけど今日も派出所で早矢を休ませてやってくれないか？」

結局、今日もまた早矢を派出所の奥で休ませる事になり……

「両津うううぅぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇぇーーーっ!!」

またまた亀有メモリアルをプレイし続けている左近寺が助けを求

めて飛び込んできた。
「派出所で起きるイベントの大部分は麗子の好感度を上げてしまう。
それとマリアの好感度が上がるイベントも地味に多い。
部長が爆発するギリギリを見極めて、可能な限り勤務をサボれ。
それと麗子の好感度の上り幅が大きいイベントが起きる日は派出所に近づくな。
逆に麗子の好感度が下がるイベントや、上り幅が小さいイベントが起きる日は、
全力で勤務を行って部長の怒りゲージを下げておくんだ」
「しかしそれではアイテムやプレゼントを買う金が……」
「金はギャンブルで稼げ！　ミニゲームが上手くなれば警察の給料などどうでも良くなる」
「分かった！　助かったぞ両津！」
そんな両津と左近寺の会話を……
「……麗子さんの好感度が上がりにくいイベントを狙うんですか」
仮眠を取っていた筈の早矢がやっぱり聞き耳を立てていた。
……
……
……
その日の夜。
「だいぶ競馬の勝ち方が分かってきましたわ。　パチンコも慣れれば簡単ですね。
後はできるだけ弓道場に通って……あら、警視庁騎馬隊のお世話係ですか？
懐かしいですね、あの時は両津さんと2人きりで馬に乗って、運動場を走ったのでした。
もちろんＹＥＳを選んで……」
……
……
……
……数日後。

「……早矢、一回検査してもらった方が良いぞ、絶対」
「大丈夫です」
……磯鷲早矢、またまた完徹である。
昨晩プレイした亀有メモリアルであったが、途中まで順調にシナリオを進められたものの、途中から右京（をモデルにしたキャラクター）との交流がどんどん増えていき、気がつけば右京（をモデルにしたキャラクター）と両津（をモデルにしたキャラクター）のデートシーンや、流鏑馬の競技大会で絆を深めるシーン、結婚式のシーンや、新婚旅行のシーンや、新婚生活のシーンや、R―18一歩手前のエロハプニングといった愛のメモリアルを延々と見続ける羽目になり、スタッフロールが流れる頃には完全に夜が明けて、勤務時間直前になっていたのだ。
「勘吉、悪いんだけど今日も派出所で早矢を休ませてやってくれないか？
ああ、うん、本当に悪いと思ってるよ」
結局、今日もまた早矢を派出所の奥で休ませる事になり……
「両津うううぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇーーーっ!!」
またまた亀有メモリアルをプレイし続けている左近寺が助けを求めて飛び込んできた。
「右京は好感度が上がるイベント数は少ないが、その分好感度の上り幅が大きい。
特に体調を悪くした琴姫を2人で看病するイベント起こした場合、あっという間に他のキャラの好感度を抜き去ってしまうから注意が必要だ」
「どうすれば回避できるんだ」
「警視庁騎馬隊の世話係に任命されるイベントを回避しろ。
あれが琴姫の看病イベントの前提条件になっている」
「しかしあのイベントは早矢さんの好感度を上げてると思うんだが」
「確かに早矢の好感度も上がるが、右京の好感度の方が上り幅が大きい。

何度やっても右京ルートに入ってしまう場合、あそこでＮＯを選択するのもアリだ」
「早矢さんには大量のプレゼントを渡しているんだが、まだ好感度が足りないのか……」
「プレゼントによって上がる好感度は、品物が好みかどうかによって左右されるが、
実は上がり幅もキャラによって違う。
マリア、右京、纏、麗子、早矢の順で上がりやすい」
「早矢さんが最も上がりにくいのか……」
「マリアは何を貰っても喜ぶから一番高くなってる。
残りは金持ち程上り幅を低くしている」
「早矢さんも相当だが、麗子さんの方がお金持ちという印象があるぞ」
「麗子は花束とか、ぬいぐるみとか、そういうシンプルなプレゼントに意外と弱い。
早矢はわしにすら何が好みなのか全然分らんから低くなっている。
同じ物品を同じ相手にプレゼントすると好感度が下がる設定になってるから、
好感度を下げたい相手には安物の品を大量に送り付けろ。　オススメはカップ麺だ。
ただしマリアだけは同じプレゼントでも好感度の上り幅が小さくなるだけで、
マイナスにはならんから注意しろ」
「そうか、早矢さんにプレゼントを贈りすぎて逆に好感度が下がっていたのか……
なら、早矢さんの好感度が上がりやすいイベントは何だ？」
「やはり武道館建設イベントだな。
あれを起こす事ができれば早矢の好感度を荒稼ぎできる。
実家は呉服屋だとか、東京に１０００坪の土地があるとか、早矢に嘘を言いまくれ」
「分かった！　助かったぞ両津！」
そんな両津と左近寺の会話を……

「両津さんから貰った物ならカップ麺でも嬉しいのですけど……」
仮眠を取っていた筈の早矢（カップ麺すら貰った事がない）がやっぱり聞き耳を立てていた。
……
……
……
その日の夜。
「本名は越前屋兵介です、悪魔がとりつくので普段は偽名を使っています。
実家は１０代続いた名門の呉服屋で、赤坂に土地を１０００坪所有……
なんだかだんだん両津さんの気分になってきて、楽しくなってきましたわ」
徹夜続きのナチュラルハイによるものなのか、早矢の目がぐるぐると渦を巻くようになっていた。
今の早矢はアルコール度数６０％のビールをラッパ飲みした時と同じくらい、マトモな状態ではない。
「ああ、また部長さんにお仕置きされて……まあ、この方が両津さんらしいですわね。
あら？　レモンさんが差し入れを……」
……
……
……
……数日後。
「……早矢、もう何も言わないけどな、死ぬぞそのままじゃ」
「大丈夫です」
……磯鷲早矢、もう何度目になるかも分からない完徹である。
昨晩プレイした亀有メモリアルであったが、途中まで順調にシナリオを進められたものの、途中から檸檬（をモデルにしたキャラクター）との交流がどんどん増えていき、突如として檸檬（をモデルにしたキャラクター）が急に２０歳くらいにまで急成長した上、そんな檸檬

（をモデルにしたキャラクター）と両津（をモデルにしたキャラクター）のデートシーンや、結婚式のシーンや、新婚旅行のシーンや、新婚生活のシーンや、２人で寿司屋を経営するシーン、Ｒ―１８一歩手前のエロハプニングといった愛のメモリアルを延々と見続ける羽目になり、スタッフロールが流れる頃には完全に夜が明けて、勤務時間直前になっていたのだ。
「勘吉、悪いんだけど今日も派出所で早矢を休ませてやってくれないか？
　分かってるよ。　流石に何かあるだろうから、その辺ちょっと調べてみるよ」
　結局、今日もまた早矢を派出所の奥で休ませる事になり……
「両津うううぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇぇーーーっ!!」
　またまた亀有メモリアルをプレイし続けている左近寺が助けを求めて飛び込んできた。
「レモンルートだが、流石に幼稚園児に手を出すのは問題だという事で、
　とらいあんぐるハート2を参考に、魔法で急成長させる事にしたらしい」
「聞きたいのはそこじゃない！　どうすれば早矢さんのルートに入れるんだ!?」
「簡単だ、わしが部長にお仕置きされる回数を抑えろ」
「どういう事だ？」
「レモンルートは判定が特殊でな、わしがお仕置きされたり、
　派出所や超神田寿司から追い出されるイベントが起きると、
　時々１人で差し入れを持ってきてくれるんだ。
　他にも、警察寮の部屋の片づけに来てくれるイベントが起きる時もある。
　そういうイベントが一定回数続くと、レモンルートが確定する」
「好感度も必須イベントも関係無しにか……」
「一応好感度の設定はされているが、

レモンの好感度が上がるイベントは多すぎて回避困難な上、下がるイベントが無い。
しかもレモンはマリア同様、プレゼントでは好感度がマイナスにならない。
レモンの好感度を下げるのはいっそ諦めて、
お仕置き回数を減らし、レモンが来ない事を祈るしかない」
「なるほど、部長の怒りゲージが重要になる訳か」
「一番確実な方法は、レモンが来たら少し前のデータをロードしてやり直す事だ。
それとレモンに食パンを食べさせるイベントや、京都に行くイベント、
レモンが味見をボイコットするイベントだけは回避しておけ、好感度が急上昇する」
「分かった！　助かったぞ両津！」
そんな両津と左近寺の会話を……
「思わぬ伏兵でしたわ……」
仮眠を取っていた筈の早矢がやっぱり聞き耳を立てていた。
……

……

……
その日の夜……ではなく、翌朝。
「や、やった……やりましたわ……」
東の空に朝日が顔を出し始める時間帯に、早矢はパソコンの前で感動に打ち震えていた。
纏ルートの入る事7回、麗子ルートに入る事5回、マリアルートに入ること3回、マリア同性愛ルート（隠しエンディング）に入る事1回、檸檬ルートに入る事4回、右京ルートに入る事2回、左京ルート（隠しエンディング）に入る事1回……何度も何度も最初からやり直し、ようやく早矢（をモデルにしたキャラクター）が、両津（をモデルにしたキャラクター）に告白するシーンにまでたどり着いたのだ。
「これでようやく……ようやく私のルートに……」

目尻に涙が浮かんでいた。
ここまでの苦労が一気に報われるような気持ちだった。
これでようやく分かるのだ。
あの日、あの時、自分が身を引かなければどうなっていたのかが。
あの日、あの時、両津勘吉が好きだという気持ちを固く、強く、心の奥深くへと飲み込み、押し込んでしまわなければ、どうなっていたのかが分かるのだ。
自分と両津が結ばれていればどうなっていたのかが……それが、分かるのだと。
『お慕いしております』
『おう、わしも愛してるぞ』
『こうして2人は固く結ばれ、いつまでもいつまでも幸せに暮らしました』
……僅か3クリックで全てが終わり、見慣れたスタッフロールが流れ始めた。
早矢は画面の前で石像のように硬直し、死んだ魚のように濁った瞳で画面を見ていた。
他のキャラクターの個別シナリオは4～5時間分はあったというのに、自分（をモデルにしたキャラクター）の個別シナリオは僅か3クリック、僅か15秒で終わった。
もしかして夢なのではなかろうかとも思ったが、残念ながら現実だ。
……
……
……
……数時間後。
「……早矢、体調管理も仕事の内だって、うちの婆ちゃんが言ってたぞ」
「大丈夫です」
……磯鷲早矢、やっぱり完徹である。
「勘吉、悪いんだけど今日も派出所で早矢を休ませてやってくれない

か？
うん、またなんだよ、ごめんな」
結局、今日もまた早矢を派出所の奥で休ませる事になり……
「両津うううぅぅぅーーーっ!!　助けてくれえええぇぇぇーーーっ!!」
またまた亀有メモリアルをプレイし続けている左近寺が助けを求めて飛び込んできた。
「まあ、ネット上で叩かれてるのは知ってるよ。　一番クリアまで苦労するくせに、
早矢のシナリオだけたけしの挑戦状のエンディング並みの薄さだって。
これはここだけの話だが、
早矢シナリオと右京シナリオ担当のシナリオライターが交代したんだよ、大人の事情で。
右京シナリオの方は後任がギリギリ形にできたんだけど、
早矢シナリオの方は時間的に無理だったらしい」
「そんなのを発売するなよ……」
「色々大変なんだよ、ゲーム作ってる方も」
「だが俺はどうすれば良いんだ。
早矢さんのシナリオ見たさにゲームを買ったんだぞ、俺は」
「左近寺、お前公式サイトは見てるのか？」
「公式サイト……いや、見ていないが」
「公式サイトの新着のお知らせページによると、今夜修正パッチが公開されるらしいぞ」
「何いっ!?　本当なのか!?」
「何とシナリオが一本追加されるらしい」
「つ、つまりたった3クリックで終わった早矢さんのシナリオが……」
「ああ、たぶんな。
それとこれもここだけの話なんだが……実は今１８禁版も製作中らしいぞ。
『リトルバスターズ！』とか『戦国？恋姫』みたいに、

全年齢版と１８禁版を別ゲームとして売って２度儲ける計画らしい」
「は、早矢さんの……１８禁だと……」
左近寺の脳裏に磯鷲早矢とあ～んな事やこ～んな事をする光景が浮かび、思わず鼻血を漏らしてしまう。
「分かった！　助かったぞ両津！」
そんな両津と左近寺の会話を……
「修正パッチ、シナリオが追加……」
仮眠を取っていた筈の早矢がやっぱり聞き耳を立てていた。
……
……
……
その日の夜。
「公式サイトにアクセスして……ありましたわ、これが修正パッチ。ダウンロードして、解凍を……」
既に連日連夜の徹夜で気力体力共に限界寸前だ。
しかしそれでも早矢は最後の力を振り絞り、公式サイトから修正パッチをダウンロードした。
知りたい、どうしても知りたい。
自分があの日、あの時身を引かなかったらどうなっていたのかを。
両津が好きだという気持ちを二度と表に出すまいと考えなければどうなっていたのかを。
自分が両津勘吉と結ばれていればどうなっていたのかを……その想いが、執念が、限界寸前の早矢を突き動かしていた。
そして……
「え……？」
早矢は信じられないものを見た。
自分（をモデルにしたキャラクター）の個別シナリオが僅か１５秒で終わったのを見た時以上の衝撃と絶望を感じていた」。
即ち……
「私が……いない……!?」

存在そのものが抹消されていた。
共通シナリオでそれなりに出番があった早矢（をモデルにしたキャラクター）が一切登場しなくなっていた。
「なんで……なん……でぇ……」
涙がぽろぽろと零れて止まらなくなった。
胸がきゅうぅっと締め付けられているかのようだった。
シナリオは確かに追加されていた。
大阪への出向を命じられるイベントや、唐突に派出所の隣に大阪警察が出張所を建築するイベント、中川（をモデルにしたキャラクター）と共に串カツ屋でソースの研究をするイベント、双胴型ハインケルに無理矢理乗せられて悪党の3つ子と戦うイベント、サンミーの良さについて延々と語られるイベント……御堂春（をモデルにしたキャラクター）との交流を描いたシナリオがこれでもかってくらいに追加されていた。
……しかし、そこに早矢（をモデルにしたキャラクター）の姿は一切無かった。
それが早矢の辛さを何倍にも、何十倍にも加速させていた。
まるで自分には……磯鷲早矢には両津と結ばれる未来は無いと告げられているかのようだった。
磯鷲早矢には擬宝珠纏や秋元麗子、マリア、それに飛鷹右京と同じ土俵に立つ事すら許されないと告げられているかのようだった。
それが辛くて、悲しかった。
「ううぅ……うう～～～……」
早矢が1人慟哭していた。
誰にも見せられない、誰にも見せた事のない、幼女のように泣きじゃくる早矢の姿があった。
……
……
……
「はぁ……私、何をやってるんでしょうか……」
亀有公園のブランコにて、早矢は1人うなだれていた。

今日は非番の日であるために、隣に纏はいないし、制服も着ていない。
普段の彼女なら非番の日は新葛飾警察署の弓道場や剣道場で弓や薙刀、剣道や柔道の練習をしていたり、近所の人に茶道や琴を教えてたりするのだが、今日はそういう事ができる気分ではない。
今の自分の精神状態では、弓も、茶も、琴も、何もかもが上手く行かないと分かり切っていたからだ。
昨晩の事を……いや、亀有メモリアルを買ってきた日から今日までの事を思い出し、また目に涙が浮かんできた。
ゲームの中での事とはいえ、纏も、麗子も、マリアも、右京も、檸檬も、本当に幸せそうに笑っていた。
彼女達には輝くような未来があって、自分にはそれが無いのではと思っていまう。
それが根拠の無い思い込みだと頭では理解しているが、それでも……
「早矢、何やってんだこんな所で」
……そんな早矢の前に、私服姿の両津がいた。
「両津……さん……？」
一瞬、自分はまだゲームをしていたのだろうかと思ってしまう。
信じられないといった表情で両津のゴツい顔を見上げてしまう。
ああ、やっぱりかっこいいな……と、世間一般の女性とはちょっとズレた顔の好みでそう感じる。
「あの？　どうしてここに？」
「非番だよ。　派出所に予想をメモした新聞を置き忘れてたから、急いで取りに来たんだ。
今日のレースは荒れそうな気配だからな、上手くいけば万馬券だ」
見れば、超猛スピードで駆け抜けたためか、タイヤやブレーキから煙が漂う自転車が亀有公園前に置かれていた。
「それより早矢、今泣いてなかったか？」
「いえ！　眼にゴミが入って、取っていた所です！」
……早矢は咄嗟に嘘を言った。

早矢の父が何よりも嫌う嘘を言った。
「そうか、最近空気が乾燥してきてるし、そんな所に1人でいると寒いだろ。
わしのコーヒーをやるよ。　さっき買ったばかりだからまだ暖かいぞ」
両津がジャケットのポケットから未開封の缶コーヒーを出して、早矢に手渡す。
ゲームの早矢は、缶コーヒーを渡しても好感度は上がらない。
好感度が上がると設定されているプレゼントが数える程しか存在しない。
しかし、現実の早矢はどこにでも売っている、安物でありきたりな缶コーヒーを渡されただけで、心臓が飛び跳ねそうなくらいに嬉しかった。
「纏が心配してたぞ、最近眠れてないんじゃないかってな」
「……徹夜は、もうしませんわ」
「なんだ、やっぱり徹夜してたのか。　麻雀仲間でもできたのか？」
「パソコンを買いました」
「はっはっはっ、そうかパソコンか。　使えるようになると楽しいよな。
わしも昔は世界のおげれつサイト巡りで何日も徹夜したよ」
「両津さんらしいですね」
「まぁな」
早矢は思う。
嘘つきで、失敗を誤魔化してばかりで、お金に目が無くて、何でも挑戦して、どこまでも自由な両津が好きだと。
そして同時に、早矢は思う。
もしも両津に、今でも貴方が好きですと伝えたら、どうなるだろうかと……
「……競馬、今から行かれるんですよね？」
「そうだよ、今日はガッツリ儲けてやるぜ」
「一緒に行っても良いですか？」

「へ……？」

だけど早矢には、今でも貴方が好きですと伝える勇気が無いので……この位で良いかと妥協した。

……なお後日。某婦警がはずれ馬券の山に沈んでいたり、某ゲーム会社が（物理的に）炎上したり、某巡査部長が簀巻きにされて東京湾に漂っていたりしたが、それは別の話である。

こち亀単独二次創作「うそつき早矢」

『競馬とはお馬ちゃんが、私にお金を運んでくれる素晴らしいものなり』これは警視庁きっての競馬好きである両津勘吉の言葉である。

この日も競馬場では幾人もの夢を乗せ、欲望も乗せ、競走馬達が死力を尽くす。

先頭馬の鼻先がゴール板に到達する瞬間、競馬場のドリーマー共が嘆き、悲しみ、悔やみ、絶望し、そして狂喜する。

「きゃあああぁ！　当たった⁉　ああ、当たりましたわっ!!」

その中には新葛飾警察署の婦警、磯鷲早矢の姿もあった。

彼女は嘆く者ではなく、悲しむ者でも無く、悔やむ者でも絶望する者でもない……狂喜する者であった。

ある切欠で彼女が非番の日に競馬場に通うようになって幾月かが過ぎ、自宅にはハンマーソングと痛みの塔ごっこができる位のはずれ馬券が積み上がり、今日ようやく彼女は勝馬を的中させる事に成功したのだ。

「オッズは１．８倍で、５０００円を賭けましたから……９０００円⁉

９０００円になりましたわ！」

彼女は所謂良家の子女だ。

普段目にする金額に比べれば、９０００円ははした金だ。

だがしかし、この日までの彼女の苦労を想えば……ぶっちゃけ下手な鉄砲数撃ちゃ当たるという領域ではあるが……苦労を想えば、手元の馬券が輝いて見えた。

「よっしゃあ！　的中だぁっ!!」

喜びにふける早矢の近くで、野太い声の中年男が歓喜に震えた。

「凄いよ両さん、３連単だから……１５７．７倍⁉　万馬券じゃないか⁉」

３連単とは、一着の馬、二着の馬、三着の馬を着順含めて予想する種類の馬券である。

一着の馬のみを当てれば的中になる単勝と比べ、的中させる難度

も、的中させた時のリターンもケタ違いになる。
「これだから競馬は辞められん。　見ろ、これが１５７万円の馬券だぞ！」
角刈り中年男……早矢と同じく新葛飾警察署の警察官である両津勘吉が自慢げに当たり馬券を掲げ、両津の競馬仲間達が色めき立つ。
「今日は銀座に行くぞ！　祝勝会で朝まで飲み明かそうぜ！」
競馬で大当たりをした日は、決まってお祝儀だの祝い酒だのと言って周囲の者を誘って宴会を開くのが両津の性格だ。
こういう気前の良さ、カラッとした性格に惹かれるためか、この男の周囲にはいつも人が集まってくる。
そして……
「……早矢？」
「え、あ……両津さん!?　どうしてここに!?」
「何言ってるんだ、わしが競馬場にいるのは当然だろ。
早矢こそ何でこんな所に来てるんだ？」
「わ、私は、今日は非番で……あ、その……や、流鏑馬の参考にならないかと……」
早矢が９０００円に換金できる当たり馬券を隠しながらそう答える。
なお、早矢は非番、両津は勤務日であるが故に、この場にいてはいけないのはどちらかと言えば両津の方である。
「まあ良いや、今から飲みに行こうぜ、今日はわしが奢ってやるから」
両津がにこやかに笑いながら早矢を誘う。
その顔を見ただけで、その声を聞いただけで、早矢は自身の胸の奥が熱くなっていくのを感じた。
なお、早矢は凄い下戸で、しかも両津は本日勤務日である。
早い話、二重の意味で両津の発言は駄目人間の極みである。
だがしかし、ある意味それは両津の美点であり、両津の欠点なのだ。
早矢はそんな両津を好きになったのだ。
この物語は、才色兼備の婦警・磯鷲早矢の恋の物語である。
磯鷲早矢が両津勘吉への恋心を胸に、もがき、足掻き、苦悩する物

語である。
「見ろ、今日のわしは大金星、一気に１５７万円も稼いだ。
この万馬券の輝き、これだから競馬は面白い」
両津がついさっき当てたレースの馬券を早矢に見せる。
早矢はそれを手に取り、まじまじと見つめて……
「……あ?」
「わ、わしの１５７万円がああああぁぁぁーーーっ!!!」
……訂正、この物語は基本才色兼備だが時々ぽんこつな婦警・磯鷲早矢の恋の物語である。
……
……
……
……
ある日のお昼時の事。
「……何だろ、これ」
早矢の同僚にして両津の又従妹でもある擬宝珠纏がうっかりミニパトにお弁当を置き忘れてしまい、探しに戻った際、一冊の文庫本を見つけた。
自分の物ではない……たぶん早矢の物だろうとは思ったが、今まで纏は見た事が無かった。
「えっと……やけに汚い文字だな、読み難くて仕方が無いよ……
あちきは忍者でごわすごんすごわす……これを書いた奴は小学校出てるのか?」
ぺらぺらと頁をめくる。
何度も何度も……１０回も２０回も、もしかしたら１００回以上も読み返した本だと分かった。
そして気がつく……
「この癖のある文字、勘吉のじゃないか?
著者は……うわぁ、やっぱりそうだ、勘吉の本だ」
その文字は何度も何度も見た事のある文字だった。
短い期間ではあったが。同じ屋根の下で暮らしていたのだ、嫌でも見慣れてしまう。

妹の檸檬は味のある字だと言っていたが、纏にとっては単なる下手糞な字だ。
そして同時に思う、一体誰がミニパトに両津の本を置いたのだろうと。
そんな纏の疑問は、割とすぐに解消される……
「そうなんだよ、あのシーンは思わず目頭が熱くなったものだ」
「うむ、荒木又右衛門が迷いを捨て、信念と共に……」
お弁当と偶然見つけたボロボロの本を持って署内に戻ると、いつも交通課の婦警達が集まってミニ昼食会をするテーブルで大原部長と妹の檸檬が何やら語り合っていた。
「檸檬、こんな所で何やってるんだ。　大原部長の仕事を邪魔しちゃ駄目じゃないか」
「いや、すまない。　わしが呼び止めてしまったんだよ。
昨晩の特番時代劇が思いのほか面白くてな、どうしても誰かに語りたかったのでな」
「纏、携帯電話を家に忘れていたぞ」
檸檬が幼稚園のカバンから最近買ったばかりのスマートフォンを出す。
神田明神で買った……もとい、頂いた御守り付きのスマホは、間違い無く擬宝珠纏の持ち物だった。
「え、今日はちゃんと持って……ありゃ、無い!?」
自らのポケットを手探り、そこに入れたハズの物が影も形も無い事に気がついた。
「半日ずっと気づかなかったのか?」
「午前はずっとミニパト乗ってたからかな?　無電で連絡つくから気にならなかったよ。
ありがとな檸檬」
姉妹というには年が離れ、知らぬ者が見れば親子のような2人である。
機械音痴で年の割に子供っぽい所がある纏と、年齢の割に成熟している檸檬、どちらが姉でどちらが妹らしいかは、人によって意見が異

なるところであろう。
「あ、早矢、待たせてごめん」
弁当を手に待っていた早矢を見つけ、纏が手を振る。
「それじゃあ食べましょうか、纏さん」
「おお早矢君、昨晩のＮＨＫを見たかね！
特番時代劇鍵屋の辻、いやぁアレは本当に素晴らしかった」
２人が近くの机に各々の弁当を広げようとすると、空気を読まない大原部長が割り込むように話しかけてくる。
早矢も時代劇好きで、子供の頃から司馬遼太郎等の小説に慣れ親しんでいるが故に、当然のように話が通じると思い込んでいる……が……
「え……えねーちけー……？」
早矢はきょとーんとした表情で部長の顔を見返していた。
「大原部長、早矢の家にテレビはありませんよ」
「なに、そうなのか!?」
「すみません、父の方針で……」
「むう、それは残念だな……仇討ちのシーンなんか迫力があって良かったのだが……」
「ぱ、パソコンならありますわ！」
「え、早矢パソコン持ってたのか!?」
「こ、この間……しょ、諸事情あって……」
まさか纏達をモデルにしたギャルゲーをプレイするためとは言えず、早矢が微妙に言葉を濁す。
「……部長って、パソコン持ってましたよね？」
「まあ、あまり得意ではないが」
両津の貯金を横領して高い盆栽を買った時等に使っていた。
「ＮＨＫならオンデマンドでも見れるよ」
「何、そうだったのか」
「纏、スマホ」
「ああ、良いけど……」
「纏、パスワードはかけた方が良いぞ」

「うるさいな」
檸檬が纏のスマートフォンを手に取り、ぽちぽちと何やら操作する。
この幼稚園児はどこぞのスーパー小学生や、僅か数日でパソコンを手足のように使いこなせるようになった祖母程ではないが、電子機器もそれなりに使える。
部長、早矢、纏の機械音痴トリオは目の前の幼稚園児が何をやっているのか誰一人として理解できていない。
「ほら、このページ」
「ほぉ～、放映した番組を見直せるのか」
「し、知りませんでしたわ……」
「あたしはそもそもネットに繋がる事を今知った」
大の大人3名が幼稚園児からスマホの使い方を教わる図……こんな光景が普通に展開される所が新葛飾警察署の恐ろしい所である。
「分かりました、今日の勤務が終わったら見てみますわ」
「そうかそうか、いや、話が通じる人が増えるのは嬉しいな。
派出所にはわし以外時代劇が分かる者がいないからな」
「うん、あれは脚本が良い、役者が良い、演出も良い、良作だった」
部長と檸檬は同好の士（候補）を見つけ、ちょっと嬉しそうだ。
そんな中で、早矢と纏のがくぅぅっと鳴った。
「……お昼ご飯、食べようか」
「……そうですね」
「檸檬、せっかくだから一緒に食べるか？」
「うん」
お弁当を忘れてスマホを忘れて、昨日の時代劇の話とか、ＮＨＫオンデマンドの話とかも挟まり、昼休憩の時間を盛大に浪費していた。
早矢の弁当はそれこそ高級料亭かって位に手の込んだ煮物やお造り等が詰め込まれたもの、檸檬の弁当は両津勘吉が栄養価やら見栄やらを気遣って無駄に手の込んだものだ。
一方、纏のそれは店の余り物を適当に詰めたちらし寿司……ぶっちゃけ1人だけ手抜き臭さの強いものだ。

「相変わらずと言うか、勘吉が作った弁当はいつも手が込んでるよな。
ハート形に固めた卵焼きとか、兎の形に切ったニンジンとかあって」
「そうか？」
『勘吉が作った』という単語が出た瞬間、早矢の耳がピクンと震え、視線が檸檬の弁当に固定された。
「あたしが子供だった頃はもっと手抜きだったような気がする。
今更文句言う気無いけど」
「勘吉が来たからじゃないか？」
「あいつ本当に檸檬が関わると急にマメになるよな」
「板前をやる時もマメだ」
会話を続けながら、檸檬は一つ、また一つと手料理を口に運ぶ。
早矢にはシンプルなデザインの弁当箱がまるで宝石箱の如く輝いて見え、箸で運ばれる手料理の一品一品に思わず目を奪われていた。
「それは……それもそうか、お婆ちゃんが認める位だからな。
あいつの部屋、相変わらずなの？」
「相変わらずだ」
「相変わらず……？」
姉妹間の会話についていけず、早矢の頭上にハテナマークが何個も浮かぶ。
「あの馬鹿、また檸檬君に部屋の片づけをやらせているのか」
一方、事情を知っている大原部長は呆れた様子でため息をついた。
「好きでやっている事じゃ」
「本来、自分の部屋は自分で片付けるべきだろうに。
全く、恥ずかしいとは思わんのかあいつは」
「恥ずかしいとは思ってると思いますよ。
ほら、前に檸檬が署長さんの代理で勘吉に説教した時あったじゃないですか。
あの時はしばらくガチ凹みしてましたから」
「1週間で元に戻ったがな」
「……そんな事、あったんですの？」

「あった」
「あったんだよ」
「うむ、あったな」
「し、知りませんでしたわ……」
意識的に両津の事を避けていた時期だろうかと、部屋が若干頭を抱える。
両津への恋心を再認識し、少しばかり前に踏み出す勇気を持ったが、前途は多難と言わざるを得ない。
「あの、お部屋の片づけというのは？」
「檸檬が時々ニコニコ寮に行って、勘吉の部屋を片付けたり、夕ご飯のおかずを準備したりしてるんだよ」
「なっ……!?」
なんて羨ましい……と、口から出かけて、慌てて止めた。
早矢が昔読んだ恋愛小説の、所謂押しかけ女房的なシナリオをそのまま再現するかのような話だからだ。
『男を掴むためにはまず胃袋を掴むべし』と、同僚の早乙女リカも言っていた。
ただし、当の本人の料理スキルは壊滅的である。
「勘吉も自力で片付けようと努力はしている。　昔より改善の傾向がある」
「幼稚園児に片付けて貰って何も感じなかったら、警官としてというか、人としてアウトだろ。いや幼稚園児に改善の傾向とか言われてる時点でアウトだ」
早矢にはそんな檸檬の様子を見て、恋人をすっ飛ばして夫婦のような、謎の信頼感、謎の連帯感のようなものを感じていた。
「あっ、そうだ忘れる所だった。　ミニパトに置いてあった本、早矢のか？」
直後、纏がハンドバックの中から古びた本を取り出し……早矢がそれを視界に入れた瞬間、バッとひったくるかのように奪った。
「……早矢？」
早矢の予想外の行動に、思わず纏は首を傾げた。

「……見ましたか？」
　早矢は顔を真っ赤にしながらそう尋ねる。
「見たかって……いや、まあ見たけど、今の本って早矢のだったのか？」
「違いますっ!!」
　早矢が力強く断言する。
　しかし、基本他人の表情を伺うのが苦手な纏であっても一瞬で分かる……たぶん嘘だと。
「いや、別に責めてる訳じゃないし、怒ってもいないよ。
　ただ何であんな本を持ってたのかなって、ちょっと興味が……」
「違います！　違いますから！」
　早矢は誰の目にも明らかな下手糞な嘘を言う。
　その本は早矢と勘吉を結び付けた大事な大事な本である。
　早矢が初めて両津勘吉の名を知り、初めて両津勘吉に興味を抱いたきっかけを作った本である。
　親が怖くて、どこまでもどこまでも親の顔色を伺いながら生きていた早矢にとって衝撃的な……どこまでも自由で、どこまでも自由な両津勘吉の本であった。
「今の本、昔両津が書いた本だな」
　無駄に両津との付き合いが長い部長は、ほんの僅かな時間で纏が持っていた本が両津の書いた本だと察する。
　両津の顔が頭に浮かぶだけで、自然と眉間に皺が寄る。
「部長、一瞬しか見せなかったのに良く分かりますね」
「できれば分かりたくなかった」
　部長は苦虫を噛み潰したかのような表情だ。
「纏、檸檬も分かったぞ、勘吉の本だった」
「え？　本当にか？」
「前に婆ちゃんに買ってもらった」
「婆ちゃん、絶対教育に悪いぞあれ……いや、3ページくらいしか読んでないけど」
「面白かった」

「面白かったぁ!?」
纏は一瞬、妹の感性を疑った。
味覚の確かさは誰もが認める所……どころか、超神田寿司が檸檬の味覚に依存している所すらあるのだが、それ以外の感性が微妙にズレてるのではと。
「分かります」
「分かんの!?」
「わしは全然分からん、分かりたくも無い」
「あ、良かった大原部長は普通だった」
纏がそっと胸を撫でおろしつつ、ふと時計に目をやった。
「昼休みもうあんまり残ってないぞ。
檸檬、お姉ちゃんはそろそろ仕事に戻らないと。　1人で帰れるか?」
「自転車がある」
「そっか、危ないと思ったらすぐに私か勘吉に電話するんだぞ。
すっ飛んで行くからな」
檸檬が幼稚園の黄色い帽子を被り直すと、とてとてと正門へと駆けていき……
「そう言えばあの時、両津をホテルに監禁して無理矢理続きを書かせたんだったな。
結局出版はされなかったが」
……部長がそんな独り言を呟いた瞬間、檸檬と早矢の動きがピタッと止まる。
「最初は署の備品置き場に置いておいたが、改装の時に確か……
どこに移動させたんだったかな……」
……
……
……
「わしの……わしの万馬券が……157万円が……」
渦中の人物・両津勘吉が派出所の机に突っ伏して落ち込んでいた。
野生の直感か、勝負師としての実力故か、見事3連単を当て、直後

に突風に攫われて失ってしまったのだ。
「両ちゃん、勤務中に競馬場になんか行くからバチが当たったのよ」
「黙れ黙れっ!!　女に男のロマンの何が分かる!?」
「ロマンも何も、単に遊んでるだけじゃない。　部長が知ったら怒るわよきっと」
「何と言うか、先輩は相変わらずですね」
「１００年経ってもあんな感じよ、きっと」
　そんなある意味いつも通りの３人が日々の業務をしている所に、派出所の前にミニパトが停車した。
「両津さんっ!!」
　そしてミニパトの運転席から早矢が血相を変えて飛び出してくる。
「早矢ちゃん!?」
「どうしたんですか急に?」
　中川麗子の金持ちコンビが驚く中で、机に突っ伏している両津のすぐ隣にまで駆け寄り……
「えー。あー……えっと……」
　……当の本人も何を言うべきか決めかねていた。
　一応、彼女は今でも両津が好きだという事は周囲には隠しているつもりなのだ。
　まさか何年も前に両津が書いた小説の続きが読みたいとは言えず、無言のまま時間だけが過ぎていく。
　両津は死んだ魚のような目で早矢の顔を見上げて……
　ほんの少しだけ、万馬券を風に攫われて手放した責任を追及しようとしたが、それは流石に良心が咎めるのでやめる。
「早矢……金貸してくれ……」
　……結果、一回以上年が離れた女性に金をたかる中年男が爆誕した。
「ちょっと両ちゃん!　早矢ちゃんにお金を借りるなんて何考えてるの!?」
「給料日まで３００円しか無いんだよ!」
「どうせ競馬につぎ込んだんでしょ!　自業自得じゃない!」

「先輩なら３００円あれば3ヶ月は生活できますよ」
酷い言われようだが、紛れも無い事実である。
「あの、いくらお貸しすれば……？」
「早矢ちゃん聞いちゃ駄目よ！
１回貸したら１００回貸す羽目になるし、滅多に返さないのよ両ちゃんは！」
……経験者は語る。
「勘吉、また博打に使ったのか？」
聞き覚えのある幼稚園児の声が聞こえ、両津がドキリと肩を強張らせる。
檸檬の説教は部長の怒鳴り声と同じ、両津勘吉の弱点なのだ。
「勘吉、前から何度も言っているだろう。
お金というのはもっと考えて使わなければならん。
もちろん、お婆ちゃんも言うように、博打の無い商売は無い。
だが一時の享楽のための博打と、生計を営むための博打とでは雲泥の差がある事も……」
「うぐっ……」
両津が何も言い返せずにたじろぐ。
幼稚園児に説教される警察官という珍妙な光景が権現する。
「檸檬ちゃん、幼稚園はどうしたの？」
「今日はお休みじゃ」
「そうだったの、今日はどうしたの？」
「早矢」
檸檬が早矢に呼びかける。
「う……そ、その……」
両津が書いた小説の続きが読みたい、でも言い出せない。
早矢の心中で葛藤が生じる。
「早矢、ちゃんと言いなよ」
ミニパトの助手席から出て来た纏がぽんと早矢の背中を押す。
早矢はどうしてこうなったと頭を抱えたい気分になったが、最早ここまでくれば逃げ場は無い。

「小説の……つ、続きが……」
「……小説？」
基本忘れっぽいのが両津の性質だ。
小説と言われただけではそう簡単には思い出せない。
「勘吉、何年か前に小説を出版しただろう。　文豪警官とニュースにもなっていた」
「ああ、署長に捕まってホテルでカンズメにされたり、
公務員の副業は禁止だとか何とか言って印税を全額没収された時の」
基本忘れっぽいが、受けた恩と恨みは決して忘れないのもまた両津の性質だ。
文豪警官というワードで即座に依然受けた金銭の恨みを思い出した。
「確か隣にロボット派出所ができる前だから……
ん、檸檬はまだ生まれてすらないんじゃ？」
「勘吉、年齢の事はお互い触れない約束だろう」
檸檬はサザエさん時空を華麗にスルーした。
檸檬の初登場は１１９巻。
そして檸檬登場から連載終了まで日暮熟睡男は5回出動している。
「で、続きが読みたいのか」
「部長から、続きを書いていたと聞いているが」
「ホテルにカンズメにされて無理矢理書かされたんだよ。
あれは……中川、どうしたんだっけ？」
「署の備品置き場に運びましたよ。　その後は確か……前に署がウサギになった時、
邪魔になるからと先輩の実家に送ったと思いますけど」
唐突にウサギ型に変わる警察署は、世界広しと言えど新葛飾警察署だけであろう。
「あ～……そういえばそんな話もあったような……」
「纏さん！」
「え？　今から行くの？　勤務中……」

「浅草にパトロールに行きましょう！　私が運転しますから！」
「ちょっとちょっと!?　押すなって!!」
　早矢が超強引に纏の背中を押してミニパトの助手席に押し込む。
　檸檬もしれっとミニパトに乗り込むと、エンジンが唸りを上げた。
「……行っちゃった」
「何だったんだ？」
「先輩の実家なら、絶対に原稿を捨ててないと思いますけど……
　先輩、どんな内容だったか覚えてますか？」
「忘れた」
「ですよね……」
「ところで中川君、ちょっと先輩にカンパをする気は無いか？」
「出しませんよ、絶対」
「そこを何とか頼むよ中川。　明日は右京とだな……」
……
……
……
「いらっしゃい、何をお求めで……あら、纏ちゃんに檸檬ちゃんじゃないか」
「物置を見せてください！」
「え？　この人どなた？」
「あぁ、友人と言うか、同僚の早矢です」
「早矢さん……勘吉がいつもお世話になって……」
「物置！　見せて！　ください！」
「え、どうして……？」
　理由を尋ねられ、早矢の視線が盛大に泳ぐ。
　勢いでここまで来たのであるが、物置を見せてもらう理由は一切考えていなかった。
　まさか数年前に両津が書いた小説の続きが見たいとは言えず……
「えっと……ば……爆弾です！　時限爆弾が仕掛けられています!!」
　……結果、早矢は大嘘を言った。
「ええ!?　物置に時限爆弾が!?」

そして信じられる。
両津の周りでは良くも悪くもエキセントリックな事が多発するため、唐突に実家に時限爆弾が仕掛けられても違和感が無い。
「早矢……」
纏が凄く残念なものを見るような視線を向ける。
「言ってやるな纏、不器用なだけだ。
勘吉の事が大好きな所も含めて、大原部長とよく似ている。」
「それは……そうかもな……」
ダッシュで物置に走る早矢を2人で追いかける。
無駄に歴史が長い両津家の無駄に多い遺物の中に紛れていたものの、意外と早く目的の原稿を見つける事ができた。
「おい早矢、どうするんだよ時限爆弾だなんて。　誤魔化す自信無いぞ私は」
頭をぽりぽりと掻きながらそう質問するも、早矢は食い入るように原稿を読み漁っていて全く反応が無い。
「はぁ……仕方無い、いたずら電話でしたって事にしておくか……」
纏が早々に早矢への説得を諦め、この状況をどう軟着陸させるかを考えだした。
「纏」
「はいはい、檸檬も読みたいんだろ」
「うん」
そして早矢と檸檬が原稿を読みだした。
話の骨子は前作と同じく時代劇。
しかし宇宙人が出るわ、地底人が出るわ、半魚人は出るわ、河童が出るわ、天狗が出るわ、巨大ロボが出るわ、特殊刑事は出るわで、あらゆる意味で滅茶苦茶な話であった。
だがそんな滅茶苦茶さが両津勘吉の魅力なのだ。
そんな両津勘吉を、早矢も檸檬も好きになったのだ。
そして物語は佳境に進み……最終的には……
「寿司屋の娘と嫁にして……」
「2人で料亭を開く……か……」

早矢の声が震えていた。
寿司屋の娘と聞いて、真っ先に思い浮かぶのは擬宝珠纏だ。
だがしかし、纏の性格上、警察をやめて料亭を始めるなんて光景は一切想像できない。
しかし一方……
「そうか……料亭か……」
隣の幼稚園児がどこか納得したように目を伏せていた。
きっと頭の中で未来予想図を構築しているのだろうと、早矢は理解する。
早矢もまた、両津勘吉を心の底から好きになった女のだからこそ、早矢には分かる。
「以前はマリアさんが、今は纏さんが最大の恋仇と思ってましたけど……もしかして……」
……
……
……
「えっ……？」
そして翌日、早矢は信じられないものを見た。
密かに想いを寄せている男性である両津勘吉と、早矢の友人である日高右京が唇を重ね合っていた。
長身の右京が少し身をかがめ、上から覆いかぶさるかのように吸い付き、１０秒も、２０秒も、３０秒も唇を重ねていた。
「なん……で……」
気がつけば早矢は、その場で膝をつき、崩れ落ちていた。
信じられない、信じたくないといった思いが胸の内から溢れ出て止まらなかった。
そしてようやく2人の唇と唇が離れると、右京はとても真剣な顔で両津の目を見つめ……
「貴方が好きです、両津さん」
そう告げていた。
この物語は、この物語は基本才色兼備だが時々ぽんこつな婦警・磯

鷲早矢の恋の物語である。
磯鷲早矢が両津勘吉への恋心を胸に、もがき、足掻き、苦悩する物語である。
誰よりも嘘を嫌う父に育てられながらも、意外とうそつきな磯鷲早矢が、一歩踏み出す物語である。

こち亀単独二次創作「飛鷹姉妹のキラーパス合戦」

キラーパス……その言葉には2つの意味がある。
1つは試合の流れを決定づけるような素晴らしいパスの事。
もう1つは、パスとは名ばかりのデッドボール、あるいはオウンゴールの事。
そしてこの物語におけるキラーパスは、全力で後者であった。
この物語は、基本才色兼備だが時々ぽんこつな婦警・磯鷲早矢の恋の物語……ではない。
この物語は……
「右京じゃないか。　こんな所で会うなんて珍しい事もあるな」
「(え、誰この人？)」
……角刈りの警官の前でにこやかに微笑みつつ、じんわりと手汗を滲ませる黒髪の美女の物語である。
「(右京の知り合い？　右京の知り合いよね？　右京の知り合いで良いのよね？
こんな人一度でも会ったら絶対忘れないわよね？)」
彼女の名は飛鷹左京、角刈り警官こと両津勘吉の友人の双子の姉である。
この物語は飛鷹左京の物語である。
……
……
……
オタクの町、秋葉原。
「ガルパンが出てから、模型戦車とか、戦場のジオラマの出品が増えましたねえ」
「おかげで両津ミリタリー堂の売り上げも上々だよ」
線の細いリーゼントの男と、ゴツゴツとした体幹の角刈り男が歩いていた。
彼らの名は本田速人と両津勘吉。
いずれも新葛飾警察署所属の警察官である。

「この辺でショーケース借りてるんでしたっけ？」
「結構良い値段で売れるんだよなこれが」
「先輩器用っすから」
「小学生の頃から作り続けてるからな。　ほら、あそこで展示してる」
「ちょっと見てきませんか？」
「そうだな、寄っていくか」
　秋葉原の貸しショーケースには、様々なクリエイターが作成したフィギュアや模型が展示されており、目の肥えた客が『良いよね……』『良い……』等と呟き合っていた。
「色々あるんですね」
「ここは結構な激戦区だぞ」
「先輩が借りてる場所、どれっすか？」
「あそこだよ」
「へえ、結構目立つ場所……」
　両津が指差した先に『両津ミリタリー堂』と書かれた小さなポップ板があり、ガラスケース内には警察の職務の合間に作った戦場ジオラマがあった。
　そしてガラスケースを食い入るように見つめ、微動たりしない1人の女性がいた。
「シェリダン……ああ、シェリダン……軍の無茶ぶりに答えて作ったは良いが、
　ロクに活躍できなかった残念戦車……シェリダン……」
「な、なんか近寄りがたい雰囲気ですよ先輩」
「秋葉原だからな」
「言われてみればいつもの秋葉原っすね」
「ベトナムでは路面の悪さでロクに動かず、パラシュート降下させれば落下で破損、
　軽量化しすぎて装甲は貧弱、一体何のために生まれて来たのか……」
　女性がさらにぶつぶつと独り言を呟き続ける。
　そしておもむろにハンドバックから財布を取り出し、シェリダンの

値札と交互に視線を動かす。
財布、値札、財布、値札、財布、値札、財布、値札……
「何か凄い迷ってるっぽいですよ」
「そのようだな」
「ギリギリ買えるけど、買うと色々キツクなるパターンですねきっと」
「秋葉原だからな」
「ええ、良くある光景っす」
両津がそんな姿を見て……気づく。
「右京じゃないか。　こんな所で会うなんて珍しい事もあるな」
財布と値札を睨みつけていた女性に両津がにこやかに話しかけた。
目の前の人物をたまぁ～に顔を合わせる知り合いだと思ったからだ。
一方、声をかけられた方は……
「(え、誰この人？)」
……きょとんとした表情で突然現れた角刈り男を見上げていた。
「まさか右京がシェリダン好きだったとは知らなかったよ。
そんな印象全然無かった」
角刈りの不審者がそう続ける。
警官の恰好をしている時でも不審者一歩手前の外観だ。
私服の状態では見た目ＴＨＥ・不審者と言っても過言ではない。
「(右京の知り合い？　右京の知り合いよね？　右京の知り合いで良いのよね？
こんな人一度でも会ったら絶対忘れないわよね？)」
女性が無言で狼狽する。
なお、彼女……飛鷹左京は既に忘却しているが、過去一回だけ左京は目の前の角刈りを見た事がある。
「(ど、どんな人か分からないし、
私が戦車好きだなんて噂を流されたら姉の威厳が爆発四散しかねないし、
この場は早めに立ち去って……)」
左京が曖昧な笑みを浮かべながら財布をしまい、回れ右してダッ

シュで逃げようとしたその瞬間……
「ああ、そうだ。　丁度シェリダンのプラモを持って来てるんだ。昨日完成したばかりの」
「先輩、昨日勤務日でしたよね」
なお、両津が趣味のプラモを完成させるのはだいたい勤務日である。
「ほら、結構良い出来だろ？　良かったらやるよ」
そう言って両津はリュックからシェリダンのプラモを出して左京に差し出した。
「こんにちは、貴方の右京です」
……飛鷹左京、戦車プラモ欲しさに双子の妹のフリをする。
……
……
……
その日の夜。
「今度の日曜？　空いてますよ」
「そう、良かったわ。　ちょっと予定を開けておいて」
双子の姉妹、飛鷹左京と飛鷹右京が２人で食卓を囲っていた。
彼女らの父、飛鷹二徹は遠洋航海中のため家にはいない。
「今日は那須与一ごっこしないの、姉さん」
「毎日やってるみたいに言わないで！　とにかく次の日曜はツーリングに行きなさい」
「……ツーリング？」
「そう、ツーリング」
「オートバイ？」
「まさか馬で行く気じゃないわよね？」
「姉さん、私バイク持ってない」
「私のを貸すわ」
「姉さん、私免許持ってない」
「私のを貸すわ。　顔似てるしイケるでしょ」
「それ犯罪よ姉さん!!　そもそもツーリングって誰と!?」

「両津さんと本田さん、右京の知り合いの」
「その人達警察官よっ!!」
「分かったわ、今から6日間で免許を取りなさい。
カミサマだって世界を6日間で創ったのよ、イケるイケる」
注・無理です。
「何で両津さんとツーリングする話になったの？」
「シェリダ……ばったり会って、意気投合して、戦車カ……普通のカフェでお茶をして、
それで、来週の日曜に製鉄所に行くから、是非ご一緒させてくださいって」
「姉さん、また急場凌ぎに私のフリしてたの？」
左京は即座に視線を逸らした。
そんな姉の姿を見て、右京は深ぁ～くため息をつき……
「……分かったわ」
この状況をどうにかするアイディアを思いついた。
……
……
……
そして翌週の日曜日。
「え、バイクの調子が悪い？」
「ええ、今朝急に」
右京が……右京のフリをする左京ではなく、本物の右京がそう告げる。
若干額に汗が滲んでいるのは、基本的に彼女は嘘が苦手だからだ。
「ううむ、どうするかな……」
「あの、両津さんの免許だと、2人乗りも大丈夫だと思ったんですけど」
「……良いのか？」
「はい、お願いします」
……結局、妥協案としてバイクに乗るのは諦め、タンデムをお願いするという手段にでた。

「待たせたな！　両津のダンナァ!!」
「今日はよろしくお願いします」
待ち合わせ場所に2台のバイクが停車する。
本田と本田の彼女の乙姫奈々だ。
「お久しぶりです右京さん」
「え、あ……ど、どうも……」
誰でしたっけという単語が喉まで出かかる。
物凄く昔……具体的にはタヒチ旅行に何故か同行する事に一度顔を合わせているのだが、その後の交流は皆無だ。
「じゃあ早速出発しましょうか」
「本田、右京の体調見て休憩入れるから、無電はちゃんと聞いておけよ」
「了解だ。　奈々、ちゃんとついて来いよ」
両津と本田、奈々が付けているヘルメットは無線機付きのものだ。
あらかじめ設定してある相手に、運転中でも声を送れる。
ツーリング中はこれを使って意思疎通をするのだ。
「はい、先導お願いします」
「右京、しっかり掴まってろよ。　メットはあるか？」
「はい、お願いします」
右京が左京から借りてきたヘルメットを被り、両津のすぐ後ろに座って両手を回す。
遠出する時は基本本田のバイクを足代わりに使い、葛飾署交通課でツーリングをした時すら他人のタンデムで同行した両津であるが、決してバイクの運転ができない訳ではない。
自動車免許は全種取得済みで、ワイルド7結成の時等でしっかり自力で運転もしている。
自分で運転する機会が少ないのは、単に面倒臭がりだからだ。
そして……
「（う、右京って意外と胸あるな……）」
両津は今、珍しく自力でバイク（ただし借り物）を運転しようと思い立った事を噛みに感謝していた。

「(おお、思った以上の美味しいシチュエーションだな)」
両津が密かに鼻の下を伸ばす。
美女がぎゅうっと自分に抱きつき、ふくよかな胸の感触が背中に伝わってくる幸福感を堪能しながら、3台のバイクが高速道路をカッ飛ばし……途中パーキングエリアや道の駅で何度か休憩を挟み……
「到着だぁっ!」
「わぁ〜! うわぁ〜! す、凄い配管の数……」
「どうだ、凄いだろ」
3台のバイクが停車した。
重厚な光沢を放ちつつ、複雑に絡み合う無数の金属パイプに奈々が瞳を輝かせる。
「両津の旦那が勧めるだけあるな、こいつは確かに壮観だぜ」
「教官、早速スケッチします。 カメラお願いしても良いですか」
「応っ! 任せとけぇっ! ……素敵な写真、一杯取ってくるからね〜」
本田はバイクから降りたとたん漢らしさが一瞬で消失し、なよなよとした所作でカメラを構え、鉄と配管の化物のような建物へと向かって行く。
「先輩〜、お勧めの場所ってどこっすか?」
「おう、この時間帯だとあっちのプラントがな……」
男2人が製鉄所を前に何やかんや訳の分からない事を話し始める。
右京がヘルメットを脱ぐと、耳元に心地良い風が突き抜けていくのが分かった。
「……オートバイ、琴姫と一緒に走ってた時とは風も、音も全然違ったな」
生き物が持つ独特の息遣い、体温、そして風、流れる景色……それは過去何回も体験した、右京にとって大好きな感覚だ。
今日感じたものはどれもこれも右京にとって初体験で、未知のもので、新鮮なものだった。
ただ……
「免許は取るのは……やめておきましょう」

……新鮮ではあったが、それよりも怖さが勝った。
決して悪い物だとは思わないが、何となく肌が合わなかった。
というかぶっちゃけ怖かった。
右京は自分の手にじんわりと汗が浮かんでいるのに気がついた。
嘘がバレないかとヒヤヒヤしてた時とは別種の汗だ。
「おーい右京、こっちに来てみろよ、凄い迫力だぞ」
「あ、はい。　今行きます」
両津が1人バイクの余韻を感じていた右京に声をかける。
呼ばれた先にある光景は、メカマニアが目の色を変えるような光景だ。
「あそこのパイプがあそこで分岐して、あのバルブで量の調節で」
「先輩先輩！　あっちのパイプは何っすか!?」
「あれは天然ガスだよ。　炉の燃料をあっちのタンクから引いているんだ」
「はぁ～色々考えてるっすねぇ」
「当たり前だ、日本を支える屋台骨を作っている場所だぞここは。
スーパー電子とは別方向で、技術立国日本の最前線だ」
基本メカ好きな両津と本田が子供のようにあちこち駆け回り、パシャリパシャリとシャッターを押す。
乙姫奈々はスケッチブックに鉛筆を走らせ、工場の様子をスケッチする。
「うわぁ、この人の絵、凄く上手い……しかも描く速い……」
そのあまりに速く、あまりに精密かつ繊細のペン運びに、右京は思わず感嘆する。
「奈々ちゃんはプロですから」
「プロ……？　画家さんですか？」
「いえ、漫画家です」
「ま、漫画家!?　だからこんなに上手いんですか」
「いえ、私なんてまだまだですよ」
そう答えつつも、奈々の手は一切止まらまい。
スタープラチナかと見間違える程の速さと精確さで工場のスケッ

チを続けている。
「先輩もプロ漫画家なんですけど、正直絵心は……」
「やかましい！　わしは勢いで勝負してるから良いんだよ！」
「むしろ勢い以外何もないと言うか……」
「本田君、どうやら君とは一度ゆっくりと話をしなければいけないようだね」
　両津が何故か持ち歩いているニューナンブの撃鉄を起こした。
「え、いや、決して今のは悪い意味で言った訳ではなく、むしろ良い意味で……」
　あ、ちょっと襟首掴まないで、引っ張らないで……ぎゃあああぁぁぁぁーーーっ!!」
　奈々が工場の風景をモクモクとスケッチする。
　右京も奈々の隣に座り、本田が物陰でボコボコにされ、周囲に断末魔の叫びが木霊するのを意図的に無視しながら工場の配管に目を配る。
「(……どうしよう、全然面白くない、全然楽しくない)」
　右京は割とマジで、帰りは自分だけ電車かバスで帰れないだろうかとか、1人だけ先に帰ったら怒られるだろうかとか考え始めていた。
……

……

　その日の夜。
「姉さん、姉さん」
「何か用かな？」
「来週の土曜日、確か空いてましたよね？」
「そこは2ｃｈに書き込みましたかって言いなさいよ。　まあ、空いてるけどどうしたの？」
「ちょっと両津さんとデートしてくれませんか？」
「……え、何で？」
「あの、今日の工場見学の帰り際にですね、もしかしてつまらなかったかって聞かれまして」

「まあ、聞かれるかもしれないわね。　貴女工場とか分からないでしょうし」
「それを承知の上で勝手に約束を取り付けた姉さんはどうかと思います」
「はいはい悪かったわ、後で埋め合わせはするわよ」
「なので埋め合わせをしてください」
「なに、おねだり？　良いわよ、言ってみなさい」
「来週の土曜に両津さんとデートしてきたください」
「……何で？」
「つい二つ返事で受けてしまって。
　後で気づいたんですけど、その日はどうしても外せない用事があって」
「自分の予定位頭に入れておきなさいよ」
「余りにも退屈だったのでつい……」
「はぁ……そこを衝かれると辛いわね。
　分かったわ、もう一回だけ右京のフリをしてあげる。　どこに行けば良いの」
「上野動物園です」
「……え？」
……
……
……
飛鷹左京、被弾2。
顔面と右肩にべっちょりと付着する鳩の糞が、彼女の機嫌をこれでもかって位に損ねていた。
「ふふふ……ふふふふふっ！　右京、後で覚えてなさいよ……」
怒りの余り両肩がブルブルと震えていた。
無論、右京が何かしらの手品や超能力で鳩の運を操ったとまでは思っていないが、生来息元との相性が悪い左京を、そうと知りながら上野動物園に行かせようとした右京に対し少なからぬ怒りを覚えていた。

「……うおっ!?」
そんな左京を前にした両津が思わず狼狽え、たじろく。
楽しいデートの筈が、鳩の糞2発に被弾した美女が、明らかに不機嫌そうな顔で待っていれば、誰だってそうなる。
しかも……
「いだぁっ！」
飛鷹左京、被弾3。
「はぶぅっ!?」
飛鷹左京、被弾4。
「あ、嫌な予感……みゃぁあっ？」
飛鷹左京、被弾5。
何に被弾したのかを描写する事は、彼女の尊厳のために省略しよう。
5発の被弾によって右腕に血が滲み、全身から鼻が曲がりそうな程の悪臭を漂わせ、すれ違う通行人全員から顔をしかめさせるような惨状になっていた。
「(右京おおおぉぉぉーーーっ!!)」
左京は今、右京に対する怒りで一杯であった。
無論、今日起きた惨劇の全部が右京の仕業だとは思っていないが、その責任の何割かは右京の仕業だと思っていた。
左京は昔から動物に嫌われている。
全国学生弓道大会当日、ライバルであった磯鷲早矢に一対一の決闘を申し込んだその日に犬に噛まれて負傷した事は記憶に新しい。
それに彼女が右京と違って流鏑馬に出場したがらない理由も、どの馬からも嫌われて、蹴られたり踏まれたり糞をぶつけられたりされ続けているからだ。
そんな左京を、そうと知りながら上野動物園に行かせた右京に対し、左京は並々ならぬ怒りを覚えていた。
「銭湯、行くか」
「……はい」
両津のちょっとした気遣い、涙が出る程に嬉しかった。

が、それはそれとして……
「(右京……どうやら姉に対する敬意って奴を完全に忘れ去っているようね。
良いわ、その喧嘩買ったわ)」
そんな事を考え、頭の中で昨晩盗み見た右京のスケジュールを……両津とのデートを組み込んでも問題無い日を全力で思い出す。
「両津さん、どうしても見に行きたい所があるんですけど、今度一緒に行きませんか?」
「ああ、良いよ。 どこに行きたいんだ?」
「空母カールヴィンソンです。
両津さんと一緒なら見に行けるって知人(早矢)から聞いてまして、いつか絶対に行きたいな〜っと思っていたんです」
「なんだそうか。 大丈夫大丈夫、あそこの艦長は良い奴だからな」
その言葉を聞いた瞬間、左京の瞳がギラ〜ンと光った。
……
……
……
「高い高い高い高いっ!! 怖い怖い怖い怖いっ!!」
その日。飛鷹右京を……右京のフリをしている左京ではなく、本物の飛鷹右京を待っていたのは地獄であった。
「ヘリコプター苦手だったか?」
「苦手と言うか……無理! 無理です! 高いし揺れるし硬いし!
遊園地の観覧車でも駄目なんですよっ!!」
「え、でも行き帰りは絶対に米軍の輸送ヘリが良いって」
「ね、姉さん……ひどい……」
なんて事があったり。
「無理! 無理ですよ! 舟の上で通し矢なんてやった事ないですから!」
「早矢はできたぞ」
「あの人と一緒にしないでください!」
なんて事があったり。

「あれがＦ／Ａ―１８Ｅ、あっちはＥＡ―１８Ｇ、その向こうがＥ―２Ｃ　２Ｋ」
「……違いが全然分かりません」
「攻撃機と電子攻撃機、哨戒機の違いだよ、具体的には……」
「（姉さん、どこが楽しいのコレ……？）」
　なんて事もあって。
「そろそろ帰るか、おーい艦長！　輸送ヘリを回してくれー！」
「いっそ私だけ泳いで帰るというのは……駄目ですよね、はい、分かってました」
　なんて事もあって。
「高い！　怖い！　揺れて怖い！　落ちそうで怖い！」
「ははははは、米軍のヘリはそう簡単には落ちないよ。
　まあカプコン製のヘリは毎回と言って良いくらい落ちるんだが」
「きゃあああぁぁっ!!　落ちる!?　落ちちゃう!?」
「いだだだだっ！　冗談だって、カプコンなんてヘリメーカーは無いから！
　あ、でも胸が当たって……」
　……そういう事もあって、右京が再び大地に降り立つ頃には心身ともに疲弊しきってフラフラだった。
「わ、わざとね……姉さん……」
　瞼を閉じれば、『姉に逆らうとは愚か者め』とか何とか言いながら高笑いする左京の姿が鮮明に思い浮かぶ。
　右京は珍しく、本当に本当に珍しく……
「そっちがその気ならこっちだって考えがあるわよ、姉さん」
　……珍しく、怒っていた。
「両津さん！　今度の御休みの日にスキーに行きましょう！
　友達と良く行くスキー場があるんです！」
「スキーか、良いなあ。　どこのスキー場なんだ？」
「ちょっと遠いんですけど……」
「ここは初心者向けのコースが一切無い所だぞ。　大丈夫なのか？」
「私は得意ですから大丈夫です！　私は！」

『私は』の部分を強調している所がポイントである。
……
……
……
「ぎゃあああぁぁぁぁぁーーーーっ!!」
女の子が決してしてはいけない叫び声と共に、日鷹右京……もとい、右京のフリをしている左京がゴロゴロと転がりながら急斜面を落下していた。
「ちょ、止まらな……あああぁぁぁぁーーーーっ!! がふぅっ!!」
本人は必死こいて落下を止めようとしているものの、切り立った崖かと見間違える程の急斜面がそれを許さない。
でこぼこした路面に頭や腰を何度も何度もぶつけながら、くるくると空中で回転し……ロープウェイを支える太く頑丈な鉄柱に正面衝突した。
「お、おのれ右京……」
全身青あざだらけになった左京がぴくぴくと痙攣しながら大地に倒れ伏す。
瞼を閉じれば、『高々数時間早く生まれた程度で良い気にならないでください、ね・え・さ・ん』とか何とか言いながら高笑いする右京の姿が鮮明に思い浮かぶ。
「おーい右京! 大丈夫か!」
「だ、大丈夫です……」
正直今すぐ入院を勧められる程の重傷であったが、妹相手にやられっぱなしでいられるかという意地とプライドを支えにして、左京は立ち上がる。
「両津さん、来週ヘビメタバンド大集合、
爆音轟音１００連発スペシャルっていうイベントがあるの、御存じですか？」
「ああ、あまりにも煩さ過ぎるとか、火薬を使い過ぎるとかで、
普通の会場ではライブイベントができない連中が大集結するイベントだろ？」

「両津さん！　どうにかあのイベントのチケット取れませんか？」
「あれの主催者は勘兵衛だからな、今からでもどうにかできると思うぞ」
「ぜひ行きましょう！　２人で！」
「……え？　右京ってああいうの好きだったのか？　何かイメージが違うような」
「私は大好きです！　私は！」
『私は』の部分を強調している所がポイントである。
……
……
……
「２人のォ（ピーーー）は（ピーーー）で（ピーーー）だぜ!!
オレ（ピーーー）は（ピーーーピーーー）て（ピーーー）うれ（ピーーー）ぜっ!!」
「うおおおお!!」
「ぐおりゃ～!!」
放送禁止用語前回の歌詞をシャウトするボーカル。
狂ったようにドラムにギターを叩きつけるギター。
そしておもむろにラグビーボール状の爆弾を床にたたきつけるドラム。
直後、ステージが大爆発してバンドメンバーは当然、最前列で観劇していた客も数名黒焦げになる。
「何これ！　何これ!?　何なのこれぇっ!?」
そんな狂気の光景を目の当たりにして、右京のＳＡＮ値は消失寸前である。
「がはははははっ！　あいつらまだ生き残ってたのか、チャーリーよりしぶといな」
一方、両津は腹を抱えて笑い転げていた。
「やっぱりわざとね、姉さん……」
ひりひりと痛む鼓膜を押さえながら、右京は小さく呟いた。
「両津さん！　警視庁騎馬隊で使っている馬のお世話をしてるって

話、本当ですか!?」
「え？　まあ、今でも時々手伝ってるけど」
「是非とも一回お手伝いさせてください！」
「結構気性が荒い馬もいるけど大丈夫か？　慣れてないと危ないぞ」
「大丈夫です、私は琴姫で慣れてますから、私は」
『私は』の部分を強調している所がポイントである。
……
……
……
「右京、傷は大丈夫か？」
「馬に蹴られるのは初めてじゃないです」
日鷹右京……もとい、右京のフリをしている左京は見事に馬に蹴られていた。
顔面に蹄鉄型の痣ができ、鼻血をどばどばと垂れ流し、とても女の子がしてはいけない面相になっていた。
「(おのれ右京おおおぉぉぉ～～～!!)」
表面上はにこやかに笑っていたが、左京は内心右京に対する怒りで一杯になっていた。
「(もう良いわ、もうこうなったらこっちも本気よ右京。
流石にやりすぎと思って自粛してたけど、
こうなったら貴女の人間関係を複雑骨折させてくれる)」
それ故に左京は、心配そうに自分の顔を覗き込む両津の両肩に手をかけ、やや強引に引っ張り込み……
「んん……んぅ……」
「……んんっ!!?」
……唇と唇を重ね合わせた。
長身の左京が少し身をかがめ、上から覆いかぶさるかのように吸い付き、１０秒も、２０秒も、３０秒も唇を重ねていた。
そしてようやく２人の唇と唇が離れると、左京はとても真剣な顔で両津の目を見つめ……
「貴方が好きです、両津さん」

そう告げた。
歯の浮くような台詞を口にしながらも、思っていたよりも左京は冷静だ。
自分でも驚く位に、心臓音は小さく、穏やかで、整っていた。
「右京……お前……」
一方、両津の心中は穏やかではない。
口を阿呆鳥のようにあんぐりと開けて、目の焦点は定まらず、心臓は暴走機関車の如くバクバクと脈打っていた。
それを見た瞬間、左京はイケると思い、僅かに口角を尖らせた。
「(勝った！　第三部完！
このまま次のデートでは2人でラブホテルに消えるよう誘導してくれる！
姉に逆らった事を後悔しながら、好きでもない男のちOこで処女を散らすが良いわ!!)」
その時、その瞬間、左京は確かに勝利を確信した。
が……しかし……
「姉さん!!」
……そんな勝利の確信は、甘い甘い妄想は、次の瞬間に砕け散る。
両津と左京の目の前に、日鷹右京が現れたのだ。
「え、右京!?　いやでもこっちも右京……」
「その人は姉の左京です！
私のフリをして何度も両津さんとデートを繰り返していたんです！」
「な、何だって!?」
決して嘘はついていないが、全てを話しているとは程遠い。
「ちょ、ちょっと右京、何でこんなタイミング良く出てくるのよ!?
貴女まさかずっとどこかに隠れて様子を窺っていたの？」
「はい！　姉さんの事が心配でしたから！」
右京は力強く断言した。
そんな右京の様子を見て、左京は全てを察した。
「(しまったあああぁぁーーーっ!!　ハメられ……いや、ウラをかかれ

たぁーっ!!)」
「(そろそろ仕掛けると思ってましたよ、ね・え・さ・ん!)」
視線と視線が交差する瞬間、右京と左京は互いに相手が何を考えているかを完全に察した。
「さ、左京がわしを……」
「姉さんがそこまで両津さんの事が好きだったなんて知らなかったわ!
私全力で後押しします!」
「しなくて良いわ! 自分のケツくらい自分で拭くから……って、右京押さないで! どこに連れてく気!?」
「全力で! 後押し! しますから!」
右京が突然の愛の告白(自爆)で混乱する両津と、作戦の失敗に動揺する左京の背中を物理的に後押しし、厩舎の外へとぐいぐいと移動させる。
「ちょ、ちょっと待って右京! 前にあるのラブホテルよ!
貴女アレがナニをする場所か分かって……」
「全力で! 後押し! しますから!」
「あ、その顔は分かってる顔……じゃないわよ! 右京やめなさいっ!!
連載終わる! 連載終わっちゃうから駄目ぇっ!」
「大丈夫よ姉さん、とっくの昔に連載は終わっているもの」
「わぁ、それなら安心……じゃなくて!! お姉ちゃんまだ経験無いから……」
「頑張って!!」
右京は2人の背中を押しながら器用に無人契約機に諭吉を挿入し、やたらと妖艶な雰囲気のラブホテルの一室へと2人を叩き込んだ。
「両津さん、姉さんをよろしくお願いします」
右京は静かにそう呟くと、後は野となれ山となれとばかりに全力ダッシュでその場から離脱した。
「もう二度と右京のフリなんてしないからあああぁぁぁ〜〜〜っ!!」
その後両津と左京がナニをしたのか……それは皆様のご想像にお

任せしたい。

早矢のサバゲ黙示録

早矢は思う。
もしも両津に、今でも貴方が好きですと伝えたら、どうなるだろうかと……
とっくの昔に諦めて、昔の恋だと見切りをつけて……それでも、どうしても両津の事を目で追ってしまった。
両津の新しい面や、新しい挑戦、新しい失敗や新しい成功、恰好良い所、恰好悪い所を見つける度に、諦めて、見切りをつけたはずの恋心が熱を帯びるのが分かった。
磯鷲早矢は、両津勘吉の事が好きなのだ。
それもたぶん、出会った当初よりも何倍も、何十倍も。
「早矢さん、一緒に食べませんか？」
そんなある日の事、早矢と仲が良い婦警達が、たまたま同じタイミングで新葛飾警察署の食堂で顔を合わせていた。
事前に申し合わせた訳ではない、本当にたまたまだった。
ちょっと前に栄養バランスの悪い食事を食べ続け、体調を崩す男性警官が続出した頃、署員の健康増進を目的に、新葛飾警察署に食堂ができたのだ。
ただし、男性署員は大体ジャンキーな味を求めてラーメン屋や牛丼屋に行くため、使っているのは大体女性署員ばかりである。
さておき、食事中に恋バナ大好きの婦警が、乙姫奈々にちょっとした質問をした。
本田速人のどこが好きになったのか……そういう質問だ。
奈々がちょっとう～んと考えて……
「共通の趣味とか……かなぁ？」
そんな事を呟いた。
「最初は、白バイ隊の新人の皆さんを厳しく指導してる姿を見て、恰好良いな～とか、
憧れちゃうな～って。そういうちょっと浮かれた気分で、好きって

言っていたと思います」
実際、バイクに乗っている時の本田はモテる。
本田が昔暴走族のリーダーをしていた時や、割と過激な恰好でバンドをやっていた時は、数多くの女性を魅了していた。
いわゆる彼女ができた事も1度や2度ではない。
しかし、そんな本田の交際相手達は、乙姫奈々を除いて全員、非常に短い期間でお別れをしている。
何の事は無い、普段の気弱で繊細な姿とのギャップに耐えきれなくなるのだ。
「でも本田さんって、
バイクに乗ってる時じゃなくても素敵だなって思う事が沢山あるんです。
映画でも漫画でも、面白いと思う作品が似てて、
遊園地とか、スカイツリーとか、私が行きたいな～って所に連れてってくれて。
なんて言うか、好きだって思える事の話題も合って、それに……」
「分かった分かった、聞いた私が阿呆だったわよ」
無限とも思えるような惚気発言の連発に、話を聞いていたモブ婦警が根を上げた。
「はぁ～羨ましい事。　どっかにいないかな～、私の言う事何でも聞いてくれて、
私が欲しい物何でも買ってくれる彼氏は」
別のモブ婦警もそう言ってため息をつく。
真顔でそんな事が言える間は絶対に無理だろ……と、どこかの繋がり眉毛が辟易しそうになる台詞である。
なお、信じがたい事に新葛飾警察署の婦警はだいたいこういう感じだ。
「でも、共通の趣味か……」
早矢は思う、自分にも愛するあの人と……両津勘吉と共通の趣味を持てば、もう少し距離を詰められるだろうかと。
「お、早矢ったらなぁ～に真剣な顔してんのかなぁ～？

さ・て・は・気になる男の子でもいたりして～？」
モブ婦警が早矢を茶化してくる。
「いえ、特には」
早矢はしれっと嘘をつく。
本当は新葛飾警察署……いや、警視庁一の問題警官である両津勘吉の事が気になって仕方が無い。
「そういえば最近、早矢ってあの角刈り猿人の事、話題に出さないよね」
「そうだねえ、卒配された頃はもうこっちが引く位だったのに」
モブ婦警達が興味津々と言った様子で聞いてくる。
早矢は正直、こういう話題は苦手だ。
「何かきっかけとか、あったっけ？」
「きっかけ……ですか……？」
言われて、ふと考え込む。
自分が両津への感情を表に出さなくなったのは、いちからだろうか……
麻里愛が、自分の性別を変え、弓道と言う圧倒的に不利な土俵で自分に勝負を挑んできた時だろうか。
あの時、自分は愛の恋だの好きだのと口先だけだった思い知らされた。
自分は『好き』という言葉に、麻里愛程の決意と覚悟を籠めていなかった。
擬宝珠纏とのミレミアム婚の話がでた時だろうか。
あの時、纏は婚約を撤回しようとした祖母に対し明確に『ＮＯ』と告げた。
両津が好きだから、自分の人生なのだから、自分の意思で決めたいと告げた。
その話を聞いた時、１５０％両津との婚姻を反対する父親を気にして……いや、父親に怯えて、ロクに関係を進めようとできなくなっていた自分が惨めになった。
両津が京都旅行に行った時、纏には十手をお土産として贈ったの

に、自分には１０円ガムすら無かった時だろうか。
自分の存在を完全に忘れ去られている事に気づいて、悲しくなった。
それとも、実の親の替え玉を用意したり、３種類の戸籍を用意したり、磯鷲家の東京進出のための武道館を娯楽施設……しかもかなりピンク色の施設にしてしまった辺りだそうか。
あれで両津と父、両津と磯鷲家は共存不可能だと悟り、それからどんどん関係が疎遠になっていった。
嘘をついたというだけで即座に殴りかかってくる、吐き気がする程厳格な父、無駄に長い磯鷲家の歴史、無意味に広い磯鷲家の敷地、数だけはうじゃうじゃいる癖に誰も自分を理解してくれない磯鷲家の関係者……そんな父、そんな家、そんな連中に媚びて、良い子を演じ続けている自分、麻里愛や擬宝珠纏のように胸の奥底からの『好き』を叫べない自分。
考えれば考える程、早矢は暗い気分になっていく。
そして何より嫌いなのは……
『どっかにいないかな～、私の言う事何でも聞いてくれて、
私が欲しい物何でも買ってくれる彼氏は』
一番嫌いなのは、そんな人として最低な、自己中心的な、人を人と思わない利己的な言葉を一番体現している自分自身だ。
都合良く自分を救ってくれる白馬の王子様を待ち望み、親鳥から渡される餌を口を開けて待っている雛鳥よりも浅ましい自分自身だ。
だからこそ早矢は……
「……探してみよう、共通の趣味」
……だからこそ早矢は小さくそう呟き、強く強く決意した。
『貴方が好きです、両津さん』
つい先日、飛鷹右京がそう言って両津に口づけをした事を思い出す。
どっちにしろ、もうこれ以上は手をこまねいてはいられないのだから……
……

……

……

夕暮れ時の亀有公園前派出所にて、勤務の引継ぎの準備をしている両津と中川、麗子がいた。

「その後、結局どうなったんですか？」

その後というのは、右京の策によって左京共々ラブホテルの一室に放り込まれた後の事だ。

「どうしたもこうしたも、家まで送り届けておしまいだ」

「まさか手を出したりしたんじゃ……」

「馬鹿！　できる訳無いだろ！　部屋に入るなり泣きだして大変だったんだぞ！」

「左京さんが泣きだしたんですか？」

「わしが強姦魔に見えて、これからおげれつビデオみたいな事をされるって思ったらしい」

「犯罪ですよ、先輩」

「分かってるよ！　わしはフィクションと現実の区別くらいついてる！」

現実世界の首都高でショートカットバグを利用しようとして、ゲーム大会優勝賞金１０００万円をばら撒き、新品のＦ５０をスクラップに変えた男が言っても説得力が無い。

「だけど両ちゃん、これから右京とデートだ～って、いつもウキウキしてたじゃないの」

「実態は姉妹喧嘩に巻き込まれてただけだったよ」

純粋に美女から好意を持たれてると思い込んでいた両津にとって、このダメージは小さくない。

「そうよねえ、両ちゃんが急にモテだすなんておかしいと思ってたのよ」

「何だとこのアマァッ！」

「まあまあ、それで右京さん達、仲直りはできそうなんですか？」

「今朝日光に聞いといたよ、ウチじゃ良くある事だから大丈夫だと言ってた」

「そうでしたか、良かったですね」
「それにしても……」
両津が数日前の事……演技とはいえ、飛鷹左京から『好き』と告げられた瞬間と、唇が重なった瞬間をふと思い出す。
麗子やマリアに比べれば、華奢で、女らしさに欠ける体つきだと思ったが……強くつかめば折れそうな程に細いのに、無駄な肉が殆ど無い、強くしなやかな体躯は、それはそれで魅力的である。
あの日、右京にラブホテルに突っ込まされた時、左京が怖がって泣きだした時、強めに押せば普段見るおげれつビデオのような事が出来たのでは……そう思った。
「ちょっと勿体ない事をしたかもな……」
そう思うと、頭ではいかけない事と分かりつつも、ちょっと惜しい気分になる。
相手の混乱と負い目につけこむ強姦一歩手前の事とは分かっているが、やはり釣り逃がした魚は大きく見えるのだ。
「先輩、引継ぎの人が来ましたよ」
「やった、これで今日の仕事はおしまいだな」
「両ちゃん、今日はプラモ何個できたの？」
「4個……ってコラ！　変な誘導尋問を仕掛けるな！」
いつもの両津勘吉である。
「あれ、早矢さん、どうしたんですか？」
両津達が帰り支度を始めた時、磯鷲早矢がひょこっと顔を出す。
彼女は交通課で、派出所の勤務は基本しない。
当然、彼女の目的は仕事の引継ぎではない。
「両津さん、将棋をやりませんか？」
……つまり、これは彼女なりのアプローチだ。
競馬、麻雀、パチンコ、ビリヤード、スキー、スノーボード、スケート、野球、ラグビー、プラモ、テレビゲーム……両津の趣味は無駄に多彩だが、そのどれもが早矢の趣味趣向と掠りもしない。
その中で唯一、早矢でもできなくもない趣味として思い浮かんだのが将棋だ。

それを思いつくと、早矢はすぐさま近くのコンビニでポケットサイズの将棋盤を買っていた。
その直後、派出所には将棋盤が常備されている事を思い出して軽く後悔した。
「……あ～」
一方、美女に誘われたというのは両津は明らかに乗り気でない雰囲気だ。
「どうしたんですか先輩、将棋好きでしょう」
「そうよ、もう今日の勤務は終わったんだから、付き合ってあげたら？」
「前に早矢に将棋でボコボコにされた事があってだな……」
相手は初心者と侮って、あっという間に腕前を抜かされたのは両津にとって若干トラウマになっている。
「それに明日は早朝から用事あるしなあ」
「え？　どこかに出かけるのですか？」
「わしが率いてるチーム・ギャリソンゴリラは知ってるか？」
「えっと……すみません、存じ上げませんわ」
「サバイバルゲームのチームだよ。　最初は数人だったんだが、色々あって人数が増えたり、2回くらいメンバーを総入れ替えしたりして、。
今は二軍と一軍で分かれているんだ」
「まあ、そうだったんですの」
「ただ、二軍はずっと、二軍のままだとやりがいが出ないし、一軍はずっと一軍のままだと気が緩む。
だから時々一群と二軍で紅白戦をやって、二軍で目立った活躍をしたメンバーや、
逆に一軍なのにロクに働いてないメンバーを入れ替える事にしている」
「それが明日なんですか？」
「街中じゃあサバゲはできないからな。　施設をレンタルすると金もかかる。

だから朝早くに集合して、車で郊外まで移動するんだ」
「サバゲ……？」
「サバイバルゲームの事よ、子供が良くやる鉄砲ごっこみたいなものなの」
「山の中などで、プラスチックの弾をガスの力で発射する銃を使って撃ち合うんです」
「おい麗子、鉄砲ごっこを馬鹿にするな、男の浪漫が詰まってるんだよ」
「はいはい、浪漫でも何でも良いから、他人に迷惑をかけないようにやって頂戴な」
「バイオＢＢ弾は自然分解するようになってるから、環境破壊にはなりませんよ、麗子さん」
「山の中で鉄砲ごっこをするのが子供っぽいのよ」
麗子は呆れた様子で荷物をバックに詰めていく。
中川と両津も話しながら帰り支度をすませ、今にも派出所から去ってしまいそうな雰囲気だ。
いつもの早矢なら、いってらっしゃいと一声かけて、すごすごと引き下がる場面だろう。
『貴方が好きです、両津さん』
飛鷹右京がそう言って両津に口づけをした光景が頭の中でフラッシュバックする。
実際には、右京のフリをしていた左京なのだが、その辺の事情は早矢は知らない。
いずれにせよ、早矢は思う……ここで立ち止まってはいけない、ここで退いてはいけないと。
だから……
「……私も連れて行ってください！　私も明日は非番です！」
気がつけばまるで追いすがるかのように両津の手を掴み、そう告げていた。
……
……

……

やたらと男臭の激しい……もとい、男性密度の高いワンボックスカーがガタゴトと山道を進んでいる。

その道を行く車両は1両、2両ではない、まるでキャラバンを組んでいるかのように車両が列をなしていた。

その先頭を走るのは、両津の友人であり、元グリーンベレーのボルボ西郷が運転するジープである。

「なぁ、両津……」

ボルボが視線を前方から動かさずに両津に声をかける。

「どうした？」

両津がスコープのレンズを磨く手を止めた。

「何故、早矢さんがいるんだ？」

ボルボがチラリと後ろに視線をやる。

サバゲ用の電動ガンやガス銃が詰まれた荷台に、ガタゴトと揺れる荷台で絶妙なバランス感覚で正座をする磯鷲早矢の姿があった。

前日に動きやすくて、汚れても困らない恰好で来るようにと伝えたところ、笑える事に愛用の弓道着で早矢は来た。

正直な所、軍服、迷彩服、ギリースーツの男衆の中で、ただ一人弓道義の美女が混じっているというのは、かなり異様だ。

最近はかなりマシになってきているが、若い女性への免疫が薄いボルボはさっきから動揺しっぱなしであるし、基本女性との付き合いが無い他の男衆の注目もかなり集めている。

「昨日急に付いてきたいって言い出したんだよ」

「ウチは初心者お断りのチームだっただろう。　まさかとは思うが経験者なのか？」

「あの格好を見て察しろよ」

サバイバルゲームは、山の中、森の中でＢＢ弾を撃ち合うゲームである。

室内や市街地での戦いを想定する場合もあるが、今回は野外での戦いを想定している。

当然、森の中での視認性が悪い恰好の方が断然有利だ。

「昔剣道着やテニスウェアでサバイバルゲームをやろうと言い出した時があったな」
「あまり思い出したくない事を思い出させるなよ、とにかくそう言う事だ」
いくら動きやすくて、いくら着慣れているからといって、普通は弓道着でサバイバルゲームに臨む者はいない。
よって磯鷲早矢はサバゲ経験が一切無いド素人だと判断される。
「とりあえずルールはさっき簡単に説明してある」
「大丈夫か、初心者虐めにならんのか？」
チーム・ギャリソンゴリラは現役の自衛官やアメリカ海兵隊といった腕利きが多数集まるチームである。
二軍ですらそこいらの素人集団とは一線を画す腕前であり、一軍に至っては下手をすればレンジャー部隊にすら匹敵する練度を誇る。
そんなギャリソンゴリラの紅白戦の中にド素人が放り込まれれば、まず間違いなく何もできないままハチの巣にされ、二度とサバイバルゲームに関わろうとしなくなるだろう。
「わしも一応止めたんだが、どうしてもって言ってだな……」
男が美女の頼みに弱いのは万国共通である。
「着いたぞ、みんな準備しろ」
ボルボのジープが停車する。
両津の謎人脈で探してきた、サバイバルゲームでの使用が許されている土地にまで来たのだ。
すぐさまギャリソンゴリラのメンバーが車から降り、手際良くフラッグ（相手チームに奪われると負けになる攻撃目標）の準備や、交戦可能エリアや退場者エリアの場所に目印を作っていく。
「えっと……これは……な、何でしょうか……」
当然、サバゲ未経験の早矢は何か手伝える事は無いかとキョロキョロと辺りを見回しつつも、何も思いつかずにオロオロするばかりである。
「早矢、来る前にも簡単に説明したが、もう一回ルールを確認するぞ」
「は、はい……」

「これがサバイバルゲーム用の銃だ。　ガスの注入は済ませてある。
小型軽量で、初心者でも扱いやすいのを選んだ」
「はい、ありがとうございます」
「ここが安全装置、これを奥に倒すと弾が出るようになっている。
誤射すると危ないから、交戦エリア外では手前に戻しておくように。
弾は分解性プラスチックだが、目に当たると流石に怪我をするから、
交戦エリア内では常にゴーグルをつけるんだぞ」
「はい、これですね」
両津のお古のゴーグルで目を保護する。
男性用の物なので、少し大きめだが……好いた男性とお揃いというだけで、早矢は少し嬉しくなる。
「弾が身体のどこかに当たったらヒットだ。
ヒットと大きな声で言って、両手を上げながら退場者エリアに移動する事。
時々当たっても戦闘を続行しようとする不届き者がいるが、
そういうのはルール違反、マナー違反だからな」
「はい、分かりました」
「フラッグの奪取か相手チームの全滅で勝ちだ。
今回は防犯用ブザーをフラッグにする、
このスイッチを押せば大音量でブザーが鳴るから、
フラッグの元に辿り着いてブザーを鳴らせば勝ちになる。
ブザーの位置はあらかじめ決めてある。　勝手に移動させたら反則負けだ」
「ブザーを鳴らせば勝ちになるんですね」
「銃の構え方とか、身の隠し方やバレ難い動き方なんかは実戦でレクチャーする。
しばらくはサバゲの雰囲気に慣れる事だけを考えていてくれ」
「はい、よろしくお願いしますわ」
早矢がぺこりと頭を下げた。

そんな早矢の可愛らしい姿にギャリソンゴリラの男衆がでれ～っと鼻の下を伸ばし……
「てめぇら美女に弱いの全然治ってねえな！
見惚れてる暇あったらとっとと準備しとけよ！」
両津の罵声によって追い散らされた。
……で。
「えっと、あっちこっちから銃声が……ど、どこを狙えば……」
「早矢伏せてろ！　丸見えだぞ!!」
「へ……？」
ズダダダダダッ!!
「きゃあぁっ!?　ひ、ひっとです……」
……1戦目、右も左も分からないまま二階級特進。
「あそこから攻撃されてるから、この木の陰に隠れながら……あ、あら？　弾が出ない……」
「早矢、安全装置！　それじゃ撃てないぞ！」
「え？　安全装置!?　えっと、どこ、どこに……」
ズダダダダダッ!!
「あいた!?　ひ、ひっと……」
……2戦目、安全装置の切り忘れで隙を晒して二階級特進。
ターン……ペチーンッ!!
「え……あ……ひ、ヒットです！」
……3戦目、敵スナイパーに狙われて二階級特進
慣れぬ環境故か、慣れぬ武器に戸惑っているためか、早矢は全く良い所無しで何度も何度も敗退していた。
そして……
「一軍の三連勝か……まあ、順当と言えば順当だな。
両津、二軍の中にめぼしいのはいたか？」
「正直微妙だな」
「あの……すみません、何もできず……」
「気にするな、初心者はそういうものだ」
両津はそういうが、早矢は何とも言えない居心地の悪さ、居た堪れ

なさにやきもきする。
「4戦目からは一軍と二軍をシャッフルするぞ、赤と青のバンダナはあるか？」
「はい、持って来ています」
両津達が4戦目の準備をしていた。
拳銃なら普段から訓練しているから、多少は戦える筈と思っていた。
しかし早矢は想像以上に何もできずに撃たれ続け、早矢という足手纏いを抱えながらもなお圧倒的な練度で二軍を蹴散らす両津やボルボといった一軍メンバーを見て、完全に自信を喪失していた。
「おい両津、はやり早矢さんをゲームに参加させるのは無茶だったんじゃないのか。
もう少し基本から教えた方が良いぞ」
「銃に苦手意識があるのかもな……」
磯鷲早矢は、銃での射撃が苦手である。
弓矢の腕はまさしく百発百中であるのだが……その集中力は、銃を握っている時にはどうしても発揮しきれない。
「そうだ、いっそ戦弓部方式で行くか」
「戦弓部方式……あれか」
「そう、そのあれだ」
両津とボルボが言う戦弓部方式とは、先端にインクを塗った鏑矢を使い、弓と弓でサバイバルゲームをするルールである。
「弓も鏑矢も持ってきて無いぞ」
「大丈夫だ、早矢が持ち込んでる。　先端に小型ペイント玉を接着すればすぐに使える」
そして……
「え？　弓を使っても良いんですの？」
「特別ルールを採用する。　早矢のみ弓矢あり、鏑矢に当たったらヒット扱いだ」
「分かりました！　今度こそ皆さんの役に立って見せますわ！」
早矢が力強く愛用の弓矢を握りしめる。

もしかしたら使うかもと持ってきた弓矢が使えると分かり、危うく折れかけていた心に活力が戻る。
……戻ったのは良いが、この時、早矢は敵味方の区別の方法をうっかり聞き逃した。
「合図だ！　ゲーム開始！」
そして４戦目のゲームがスタートした。
早矢はゲーム開始の合図が聞こえた瞬間、恐るべき速さで茂みへと消えていった。
「良し、まずはオフェンス５名、左前方を大きく回り込んで敵の陣地に攻撃を掛ける。
ディフェンスはこことここに防衛ラインを引いて敵を待ち伏せだ。
今回はボルボが敵にいるから、絶対に油断するんじゃないぞ」
両津が赤色チームのメンバー５名を引き連れ、姿勢を低くしつつも速やかに前進し……
……ヒュン！
「……ぐわっ！　ひ、ヒット！」
……ヒュンッ！
「ぬお!?　ヒットした！」
……ヒュン！
「ヒット！」
異変が起きている事に気がつくまで、そう長い時間は必要なかった。
どこからともなく飛んでくる矢に当たって退場していくギャリソンゴリラのメンバーを何度も何度も目撃したからだ。
それも相当凄まじいペースで討ち取られているのだ。
「いかん！　各個撃破されるぞ！　身を隠せ！」
ボルボの声が聞こえてくる。
通常、作戦行動中に敵にまで聞こえるような大声を出すのが厳禁だ。
しかし、それでもなおボルボが大声を張り上げたのは、敵に居場所を知られるリスクを考慮してなお、味方に警告をする必要を感じたか

らだ。
ガス銃、電動ガンとはいえ、銃が弓矢に負けるという恐ろしい光景を目の当たりにして、ギャリソンゴリラのメンバーが恐慌状態になりつつあった。
「ははは、早矢の奴凄いじゃないか。
やっぱり本田と同じで、弓を握れば性格が変わって……」
両津が間近に迫りつつある危機に気づかないまま能天気に笑う。
そして次の瞬間……
……ヒュン！
「うぐっ!!　ひ……ヒット……」
……両津の右隣に隠れていたチームメンバーの額が綺麗に撃ち貫かれ、二階級特進した。
「……ん？」
一発だけなら誤射かもしれないと、一瞬両津が思った次の瞬間……
……ヒュン！
「ぐは！　ヒット……」
……今度は左隣のメンバーが早矢に射殺された
今撃ち抜かれた2人はいずれも赤色のバンダナを腕に巻いている……つまり、早矢と同じチームの仲間である。
「あの……あの人、もしかして・……敵味方の区別ついてないんじゃ……」
「おいおい、そんなの真っ先に説明……」
そこまで言って、両津は蒼褪める。
「……してない、かも」
「何やってんですかあんた!?　あの人間違い無く無差別に攻撃して……
がはぁっ！　ヒット！」
またもや赤色のバンダナを腕に巻いたメンバーが早矢の手で葬られる。
最早疑う余地も無い、早矢は今、目につく者を無差別に攻撃していると。

「やばい！　このままじゃ一方的にやられる！　今のどっから撃って来た⁉」
「分かりません！　と言うか、３発とも全然別の方向から飛んできましたよ！」
　両津達が狼狽えている間にも、周囲から『ヒット』の宣言が次々と聞こえてくる。
　時折見える矢の弾道はどれも全く違う場所、違う方向からだ。
「やばいやばいやばい！　本気でどこから撃ってるのか分らん！
　というかボルボの爺さんよりも早いんじゃないのか⁉」
「両津！　どうなってるんだ⁉　チーム戦から個人戦に変えたのか⁉」
「違う！　早矢が敵味方の区別がついてないだけだ！
　早矢！　ちょっと待て！　右腕のバンダナを良く見て……」
　……ヒュン！　ヒュンッ!!
「うぐっ！　ヒット！」
「ひ、ヒット！」
　両津の必死の叫びも空しく、次々と、敵味方問わず撃ち貫かれていく。
「ボルボ！　一旦休戦だ！　協力して早矢から身を守るぞ！」
「駄目だ両津！　どこから狙撃されているのかまるで分らん！
　あんな大きな弓を抱えてどうやって移動してるんだ⁉」
「……ガキの頃に見た戦争映画でな」
「ど、どうした急に？」
「弓矢と長剣とバグパイプを持って第二次世界大戦で大暴れするって映画があったんだ。
　その時はフィクションだと思って大笑いしてたんだが、
　後で実話を元にした映画だと聞いて腰を抜かした事がある」
「……ジャック・チャーチルか」
「もしかしたら、わしらはとんでもない化け物を目覚めさせてしまったのかもしれん」
　……ヒュン！　ヒュンッ!!

「ヒット！」
「ひ、ヒット！　ヒットです！」
次から次へと矢が飛んできて、次から次へとギャリソンゴリラの精鋭達が討ち死にしていく。
「両津、これは拙いぞ……」
「諦めるなボルボ！
チーム・ギャリソンゴリラの一軍二軍が揃って早矢一人に全滅させられたら恥だぞ!!」
「うおおおぉぉぉーーーーっ!!」
「うおおおぉぉぉーーーーっ!!」
……
……
……
翌日、亀有公園前派出所。
両津が机に突っ伏した状態で沈黙していた。
「……もう二度と早矢をサバゲに呼ばん」
両津は死んだ魚のような目でそう呟くと、ぱったりと倒れた。